

平成22年度

外部評価報告書

平成23年2月

小山工業高等専門学校

目 次

ま え が き

1. 外部評価委員会委員名簿	1
2. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価概要	2
3. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価委員会開催要領	3
4. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価に係るヒアリング開催要領	4
5. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価に係る事前打合せ開催要領	5
6. 小山工業高等専門学校外部評価委員会規程	6
7. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価委員会議事要旨	7
8. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価に係るヒアリング要旨	14
9. 外部評価用「評価シート（自己点検評価）」集計結果	17
10. 外部評価用「評価シート（JABEE）」集計結果	30
参考資料1「小山高専の沿革（概略）」	33
参考資料2「小山高専のJABEEプログラム」	47

※参考資料については、外部評価委員用説明資料の一部を参考として掲載した。

む す び

まえがき

昭和36年に創設され、まもなく50周年を迎える高等専門学校制度は、我が国における技術者養成制度として重要な位置を占めています。明確な教育目的を持ち、15才からという早期の、また5年間という比較的長期の体験重視型の専門教育は、実践的・創造的技術者を養成するうえで高い教育効果をあげ、各方面から高く評価されています。

しかし、一方では近年の15歳人口の減少、理科への関心の薄れ、卒業後の大学等への進学率の高まりなどの進路の多様化、さらには我が国経済の不振など、高等専門学校を巡る状況は大きく変化してきており、これらの現状や変化に伴う諸課題に適切に対応し、教育・研究の質を維持・向上させて、社会の負託に応える努力が一層求められています。

このため、本校では、高専機構の中期計画に基づき、本校中期計画・年度計画を定め、本校の活動について様々な観点からの改善・強化を続けています。例えば、複眼的視野を持つ開発型技術者の育成をめざして実施した専攻科の3専攻から1専攻への改組、特色ある教育・地域貢献プログラムのため、高専機構の特別教育研究経費を獲得しての「最先端技術を理解するための学際カリキュラム策定」や「サテライト・キャンパスの設置による情報発信と地域貢献の促進」、また広報誌やHPの刷新による広報戦略強化などは、その一部です。

本校が社会から要請される役割に更に適切に応えるには、本校の教育研究や地域貢献活動等学校運営全般について自己点検・評価を定期的に行い、同時に外部専門家等による外部評価を受けて、改革・改善のサイクルを回し続けることが重要です。このため本校では社会の第一線で活躍されている技術者や経営者、教育関係者、行政関係者からなる「小山工業高等専門学校外部評価委員会」を設け、本校の教育研究活動や学校運営に関する率直な評価やご意見を定期的・継続的にいただいているところです。

本外部評価報告書は、平成12年度に実施した初めての外部評価以降、第4回目の外部評価で、本校が平成22年6月に作成した「自己点検評価報告書(平成19年度～平成21年度)」をもとに、本年8月～9月に外部評価委員の方々より忌憚のない評価・ご意見を伺ったものを取り纏めたものです。また、平成22年10月のJABEEプログラム認定継続審査にかかる自己点検書等についても評価やご意見をいただき、本報告書に収録しています。

この外部評価委員会においていただきましたご意見・評価を、私どもは真摯に受け止め、今後の本校の教育研究活動・地域貢献活動の改善・充実に活かし、社会からの期待に十分応えられる学校作りを目指していきたくと考えています。

外部評価委員の皆様におかれましては、ご多忙中にもかかわらず本校の自己点検評価書の審査、評価委員会へのご出席など多大なご尽力をいただき、教職員を代表して心より御礼申し上げます。今後も本校の教育活動や学校運営に関しまして、変わらぬご指導・助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年 2月

小山工業高等専門学校長
荇 谷 勇 雅

1. 外部評価委員会委員名簿

(氏名)	(現職)
蟹江好弘	足利工業大学 副学長
川田重夫	宇都宮大学大学院工学研究科 教授
小久保吉雄	小山市 副市長
後藤利夫	小山商工会議所 会頭
鈴木廣明	小山市工業会会長 (関東特機株式会社 代表取締役)
吉川 薫	白鷗大学経営学部 教授

(50音順)

2. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価概要

本校における外部有識者等による外部評価は、平成12年度に初めて外部評価委員会として実施して以降、本年度で4回目であり、今回は、平成19年度から平成21年度までの3年間の自己点検評価をまとめた自己点検評価報告書（平成22年6月発行）に基づき実施した。

外部評価委員の委嘱（任期2年）にあたっては、本校と深い係わりを持つ地域の高等教育機関から3名、行政機関から1名、実業界から2名の有識者に就任をお願いした（P.1 外部評価委員会委員名簿参照）。

ご就任後各委員には、本委員会の開催に先立ち、平成22年8月10日に外部評価に係る事前打合会を開催し、自己点検評価報告書及び同概要版による説明及び意見交換を行い、82項目に及ぶ評価シートへの記入方を依頼した。また、本年10月にはJABEEプログラム認定継続審査が行われることから、JABEEプログラム自己点検書及び同概要版による説明及び意見交換を行い、10項目に及ぶ評価シートへの記入方も併せて依頼した。

以上の経緯を経て平成22年9月1日、平成22年度外部評価委員会を開催した（P.3 委員会開催要領参照）。当日外部評価委員は5名にご出席いただき、ご都合でご欠席された委員には、後日、外部評価に係るヒアリングを実施しご出席いただいた（P.4 外部評価に係るヒアリング開催要領参照）。

席上、足利工業大学蟹江副学長を互選により委員長に選出し、本校に対するヒアリングによる質疑応答等に基づき、評価が行われた（P.6 議事要旨参照）。なお、外部評価委員会において得られた各評価項目に対する各委員の評価点の平均値及び評価シートに記載された指摘事項等を、自己点検評価及びJABEEに分けて各々の集計結果に示す（P.55）。

各委員にはご多忙にもかかわらず、短期間のうちに本校の実情をご理解いただき、各評価項目について、それぞれご専門のお立場から、評価、指摘、アドバイスをいただいた。

本校では、今回の外部評価委員会の評価結果を受け、教育・研究・学校運営の質の向上に向け効果的な改善を進めていく所存である。

3. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価委員会開催要領

I 日時及び場所

平成22年9月1日(水) 14:00～
小山工業高等専門学校管理棟1階校長室

II 出席者

外部評価委員会委員

蟹江好弘	足利工業大学副学長
小久保吉雄	小山市副市長
後藤利夫	小山商工会議所会頭
鈴木廣明	小山市工業会会長(関東特機株式会社代表取締役)
吉川薫	白鷗大学経営学部教授

(50音順)

本校

苅谷勇雅	校長
瀧澤雄三	副校長(総務主事)
森夏樹	副校長(教務主事)
糸井康彦	副校長(学生主事)
新井一道	副校長(寮務主事)
尾立弘史	専攻科長
小林幸夫	地域連携共同開発センター長
高橋純一	自己点検評価専門委員会委員長
土田英一	JABEE専門委員会委員長
山下修一	事務部長
萩原隆一	総務課長
小林喜與志	学生課長

III 次第

1. 開会
2. 校長挨拶
3. 外部評価委員紹介
4. 本校出席者紹介
5. 委員長選出
6. 質疑応答
7. 総合評価取りまとめ(休憩)
8. 講評
9. 校長謝辞
10. 閉会

IV 配付資料

- ・外部評価委員会規程
- ・外部評価委員会委員名簿
- ・各外部評価委員毎の評価点一覧表(外部評価用「評価シート(自己点検評価)」)
- ・各外部評価委員毎の評価点一覧表(外部評価用「評価シート(JABEE)」)
- ・各外部評価委員から提出された外部評価用「評価シート(自己点検評価)」
- ・各外部評価委員から提出された外部評価用「評価シート(JABEE)」

4. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価に係るヒアリング開催要領

I 日時及び場所

平成22年9月7日(火) 14:00～

小山工業高等専門学校管理棟1階校長室

II 出席者

外部評価委員会委員

川田重夫 宇都宮大学大学院工学研究科教授

本校

荻谷勇雅 校長

瀧澤雄三 副校長(総務主事)

森夏樹 副校長(教務主事)

高橋純一 自己点検評価専門委員会委員長

土田英一 JABEE専門委員会委員長

山下修一 事務部長

萩原隆一 総務課長

小林喜與志 学生課長

III 次第

1. 開会
2. 校長挨拶
3. 外部評価委員紹介
4. 本校出席者紹介
5. 質疑応答
6. 休憩
7. 講評
8. 校長謝辞
9. 閉会

IV 配付資料

- ・外部評価委員会規程
- ・外部評価委員会委員名簿
- ・各外部評価委員毎の評価点一覧表(外部評価用「評価シート(自己点検評価)」)
- ・各外部評価委員毎の評価点一覧表(外部評価用「評価シート(JABEE)」)
- ・各外部評価委員から提出された外部評価用「評価シート(自己点検評価)」
- ・各外部評価委員から提出された外部評価用「評価シート(JABEE)」

5. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価に係る事前打合せ開催要領

I 日時及び場所

平成22年8月10日(火) 14:00～
小山工業高等専門学校管理棟1階校長室

II 出席者

外部評価委員会委員

蟹江好弘	足利工業大学副学長
川田重夫	宇都宮大学大学院工学研究科教授
小久保吉雄	小山市副市長
後藤利夫	小山商工会議所会頭
鈴木廣明	小山市工業会会長(関東特機株式会社代表取締役)
吉川薫	白鷗大学経営学部教授

(50音順)

本校

苅谷勇雅	校長
瀧澤雄三	副校長(総務主事)
森夏樹	副校長(教務主事)
糸井康彦	副校長(学生主事)
新井一道	副校長(寮務主事)
尾立弘史	専攻科長
小林幸夫	地域連携共同開発センター長
高橋純一	自己点検評価専門委員会委員長
土田英一	JABEE専門委員会委員長
山下修一	事務部長
萩原隆一	総務課長
小林喜與志	学生課長

III 次第

1. 開会
2. 校長挨拶
3. 外部評価委員紹介
4. 本校出席者紹介
5. 各報告書及び評価シートの説明
6. 質疑応答
7. 閉会

IV 配付資料

- ・外部評価委員会規程
- ・自己点検評価報告書・同概要版・外部評価用「評価シート(自己点検評価)」
- ・JABEE自己点検書・同概要版・外部評価用「評価シート(JABEE)」
- ・外部評価用「評価シート」の記入について
- ・学校要覧(2009)
- ・学生便覧(平成22年度)
- ・小山高専Quarterly
- ・平成19年度外部評価報告書

6. 小山工業高等専門学校外部評価委員会規程

制 定 平成16年12月1日
最終改正 平成18年 4月1日

(目的)

第1条 この規程は、小山工業高等専門学校（以下「本校」という。）の教育研究活動及び学校運営全般の改善に資することを目的として学外有識者による評価を実施するため、小山工業高等専門学校外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置き、必要な事項を定めるものとする。

(組織)

第2条 委員会は、委員若干名を以て組織する。

2 委員会の委員は、本校の教職員以外の者で高等専門学校に関し広くかつ高い識見を有する者のうちから、校長が委嘱する。

3 委員会に委員長を置き、委員の互選により定める。

4 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

ただし、欠員が生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(評価事項)

第3条 委員会は、次に掲げる事項を評価する。

一 本校の教育理念及び目標等に関すること。

二 カリキュラムの編成、教育指導及び教授方法のあり方、その他の教育活動に関すること。

三 学生生活及び学校行事のあり方に関すること。

四 学寮生活に関すること。

五 研究活動に関すること。

六 施設設備に関すること。

七 国際交流に関すること。

八 生涯学習及び社会連携に関すること。

九 学校運営に関すること。

十 自己点検・評価体制に関すること。

十一 その他委員会が必要と認める事項

(評価及び報告)

第4条 委員会は、資料による調査のほか、ヒアリング、実地調査等により評価を行う。

2 委員会は、評価報告書を作成し公表する。

(事務)

第5条 委員会に関する事務は、総務課が行う。

附 則

この規程は、平成16年12月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成18年4月1日から施行する。

7. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価委員会議事要旨

日 時： 平成22年9月1日（水）14:00～16:30

場 所： 管理棟1階 校長室

議事内容

1. 委員長の選出について

外部評価委員会規程第2条第3項に基づき、委員の互選により、蟹江委員を委員長に選任した。

2. 質疑応答について

蟹江委員長の進行により、質疑応答と意見交換が行われ、その後講評を得た。

（自己点検評価関係）

○5段階評価の配点基準について

質疑応答の冒頭で、外部評価用「評価シート」における5段階評価の配点基準について、委員間に認識の差があるのではないかとして意見交換を行った。委員側から、例えば、基本理念に沿って教育等を着実に実行していれば、通常の評価点は3であるが、5は「特に表彰に値するような場合に該当する」等の意見が得られた。

（本校）

評価点については、基準となるラインを示すべきであるが、中々示し難いところもある。肝要なのは、評価点そのものより、評価シートに記載された改善点等のコメントが重要であり、指摘事項に沿って本校として改善を目指す努力していく際の材料となるところである。

評価に関しては、内部も外部も難しいところがあるが、必ずしも良い点をいただききたいということではなく、部分的なことでも、ご指摘いただくようなことがあれば、今後の参考としていきたい。

（委員）

今回は、各委員の配点基準には認識の差があるという前提であえて評価点の修正は行わず、改善コメントを今後の改善作業のために活用願いたい。

○専攻科の構成について

（委員）

専攻科の分野に機械工学を対象とする専攻が設置されていないのではないか？

（本校）

従来から機械工学科、電気情報工学科、電子制御工学科の各課程を基とする電子システム工学専攻において機械工学を包含している。しかし「複眼的なものの見方が出来る技術者の育成」という観点から、平成22年4月から「複合工学専攻」の1専攻に改組し、本科の学科構成に応じた5コースとしている。

(委員)

1 専攻で複数コースを設定するのは、小山高専専攻科だけの特別な構成か？

(本校)

全国的な方向性としては、複眼的な視野を持った技術者を育てるといった方向に動きつつある。今後は、卒業生がそれぞれの専門性を活かしながら、他の技術者と広範な議論をするなどの能力を持たないと技術的な課題の解決が出来ない。また、外国の人達とのコミュニケーション能力も必要である。これからの技術者は専門性と総合性の両方を合わせ持つ必要があり、それを専攻科においてしっかりと行う。これが専攻科を1専攻とした理由である。

(委員)

その点について、小山高専としての独自性をどう見いだしていくのか？

(本校)

本校では、複眼的なものの見方が出来る技術者の育成を目指すことが根底にあり、それに合わせて、学内のシステムをどのように構築していくかが課題であり、本校独自の部分である。

JABEEにおける受審分野も融合・複合分野となっている。高専機構における競争的資金に特別教育研究経費がある。これは、「複眼的なものの見方が出来る技術者を育成するにはどんなカリキュラムを作っていけばよいのか」という本校の研究に対して、平成21年度、22年度の2年間、予算措置がなされたものである。

また、教員が専門性を超えて横断的な教育が出来るよう教員自身の意識及び組織についても少しずつ変えてゆかなくてはならない。

専攻科の意義について、通常、高専の本科（準学士課程）では、大学4年生位までの内容を学び、専攻科では大学院の修士課程位までの内容を学んでしまう。従って、専攻科を修了し大学院修士課程へ進学しても、専攻科課程の2年間が無駄になってしまうことから、将来的には、専攻科の定員を増やして高専独自の技術者を育成することを検討したい。

(委員)

学生が社会に出た時に、経済性とか環境上どうなのかということ等が求められる中で、専攻科の融合性というのは必要なことである。また、準学士課程卒業生の進路は多様であり、当初は優秀な技術者を育てることが主眼だったけれども、進学率の向上等に伴い、研究者や教育者等の選択もあり得る、そういった状況下で、高等教育機関としての位置付けが、大学同様の教育内容を持ちながら大学でない高専の置かれた苦しさである。

まとめとして、小山高専ではアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、デュプロマポリシーの全てにわたって明確な方針が策定され、実施されていると判断できる。

○英語力向上について

(委員)

英語力向上に向けての具体的な対応策は？

(本校)

学生の英語力に関しての評価が低いことについては、その向上の一方策として、英語科にネイティブの教員を採用すべく努力している。

○教員間の連携について

(委員)

一般科目及び専門科目を担当する教員間の連携は機能的に行われているか？

(本校)

一般科目及び専門科目を担当する教員間の連携については、必ずしも十分とは言えない。数学、物理では行っているが、教科間や学科間等、様々な形で連携を密にしなければならない。

一方、学生が一般教養をしっかりと持っていないと社会に出たときに基礎が不安定となってしまう。また、「専門学科の立場から、あまり一般科目の教育内容に関わりすぎるといけない」という意見もある。何れにしろ、学内における教員間の連携は十分取る必要がある。

また、教務委員会の下に学科間連携推進部会（仮称）という組織を立ち上げつつある。これは、一般科と専門学科だけではなく、横系という形で、学科間の連携をもう少し密に組織化しようというのが狙いである。

○教員採用について

(委員)

女性教員の比率が少ないのではないかと、また、年齢層の一部が欠けている理由は何か？

(本校)

女性教員の比率については、極端に少ないとは認識していないが、増やすべきと考える。

教員の年齢構成について、採用における審査は年齢によって左右されるものではないが、各学科における年齢構成も念頭に置きながら、書類審査、面接審査により適切に選考している。その結果として、一部欠けてしまう年齢層が生じてしまうこともある。

○学生受入について

(委員)

障害を持つ学生が在籍していないが、障害者が入学し難い環境となっていないか？

(本校)

障害を持つ学生のための環境づくりとして、スロープやエレベーター等の設置、障害者用トイレの整備等、学内のバリアフリー化等を進めている。

現在、障害を持つ学生は在学していないが、入学時に規制していることは全くない。

○教員表彰について

(委員)

教員を表彰する制度は整備されているか？

(本校)

表彰制度については、高専機構が実施している教員顕彰制度があり、それに準じて本校の表彰制度を実施している。また、今年度中に制度化しようとしているものとして、教育上優秀な教員、研究上優れている教員、地域貢献に尽力している教員など、分野毎の表彰制度を設ける計画があげられる。

○昇任人事について

(委員)

教員の昇任について、大学では昇任基準が研究一辺倒のところがあったが、最近では、教育業績、社会的な業績も含めて審査を行うという傾向がある。ただし、当該業績をどのように数値化するかで足踏みしている状況である。高専の状況はどうなっているか？

(本校)

教員の昇任については、高専設置基準における教員の資格基準に基づき、定員枠の空き状況もみながら、教育業績、研究業績、地域貢献、学校運営に係る実績を総合的に評価し、決定している。

○成績評価について

(委員)

学生の及第判定は全教員で行っているのか？

(本校)

従前は、全体会議の中でその学生について話し合っていたが、担任によって対応が違うなど不平等であるという意見もあり、何単位落としたら留年、何単位以上修得すれば進級するのように、きちんと基準を決めて判定会議により決定している。

(委員)

各学年の進級の比率が約9割となっている理由は何か？

(本校)

高校と比較して退学者が多いと文部科学省から指摘されることもあるが、高専は高校とは基準が違うことからやむを得ないことである。また、教育の質の保証の観点から、むやみには進級させられないというところもある。

(委員)

教育の質の保証の観点から、試験は厳しいものか？

(本校)

シラバスに明記されている達成目標に達していなければ、合格には出来ない。

なお、平成21年度入学者から最終の期末試験に合格出来なかった学生に対し、再試験を行うことが義務づけられており、再試験の前には必要に応じて補講を実施している。

(委員)

メンタルヘルス的な理由で留年となるケースはあるか？

(本校)

従前は、勉強しない、勉強が出来ないという学生が、同じ学年を2年間留年し、自動的に退学となってしまうことが多かった。

最近では、留年となる理由として、学業不振があげられるが、学業不振の理由としては、勉強をさぼったということばかりではなく、メンタル的な悩みを抱えて、結局学校に来られなくなった、一緒に試験を受けられなかった等の理由により、留年又は退学となる学生が多くなってきた。但し、留年となる学生の殆どが、1年間の留年で卒業している。

○就職指導について

(委員)

就職については良好な状況であるが、有名一部上場企業等へ就職させる方策を行っているか？

(本校)

一昨年まで100%の就職率の中で、一部上場、二部上場企業へ就職する学生は多数いたが、昨今の経済状況の変化に伴い、学生の就職先に変化が現れている。これは、経済状況の変化に学生が即対応できなかったことが理由の一つにあげられる。現在、進路支援室を中心に、キャリア支援という形で、企業の方に来校願って講義をしていただくとか、大学で行っているような企業説明会を行う等、いくつかの試みを始めている。

○就職後の処遇等について

(委員)

本科卒業生の就職において、大卒者と比較して、学歴上のことで不利になっていることはないか？

(本校)

大きな企業で、多少不利となっているところもある。

(委員)

就職先での定着率は高いのか？

(本校)

数ヶ月で戻ってきたり、数年で戻ってきたりするという学生は、年に1名いるかいないか程度である。

(委員)

就職先での定着率が下がる要因としては、就職先における処遇（給与体系）に問題がある。本科卒業生が就職先において、学歴上のことや処遇による挫折感を味わうのであれば、専攻科へ進学する学生が増加することが考えられ、専攻科の定員を増やす必要が生じることになるのではないか。

(本校)

専攻科を修了した場合、就職において大卒者と競い合わなければならないということが生じ、場合によっては、本科卒業生の方が有利となる場合もあり、どちらが有利か不利かは一概には説明できない部分がある。

(J A B E E関係)

○英語教育等について

(委員)

英語教育、国際情勢理解等について、更に努力をする必要がある。

○点検評価について

(委員)

P D C Aサイクルのうち、A（アクション）、即ち改善策のフィードバックが適切に行わ

れているだろうか。

(本校)

P D C Aサイクルのうち、Aの部分については、もう少し待って見ないと評価が出来ない状況にある。このことについては、教育改善推進室が中心となって、学内的には授業評価アンケート等を実施し、問題点等をピックアップした形で、研修会を開催し検討がなされている。

また、今年から、F Dポイント制というのを導入することを決めており、例えば、学内の研修会に参加したら何点とか、自分で独自の教材を作成したら何点とか、まずは自己申告制で行い、いずれはそれを教育の実績に結びつけていこうと考えている。どうしてもいろんな教員からの批判とか、あるいは平等に評価するのは難しいということで、これから検討をして徐々に改善を進めていこうと考えている。

○ J A B E E 評価について

(委員)

小山高専の目的には、深く専門を教授し、職業に必要な能力を育成することを目的とする。また、大学と高専の J A B E E プログラムの違いという中に、専攻科の修了生は、大学評価・学位授与機構の審査に合格することにより、学士の学位を取得でき、専攻科修了生のほぼ100%が学士号を取得している。J A B E E は大学と競争して評価を受けるのではないと思うし、学士号を取得することが J A B E E 評価に必要であるならば、J A B E E そのものを受審する意義が、違う方向へ向かってしまうという懸念があるがいかがなものか。

(本校)

本校において、最初に J A B E E を受審する際には、基本的に高専という教育機関が世の中に知られておらず、教職員及び学生が一生懸命やっても、世の中に出ると評価してもらえない状況下にあった。そんな中で、高専自身のステータスを上げていかなければならないということから、まず、大学と同じという評価にあげたいという意向があり、J A B E E ならば大学と対等にやれるというところが出発点となっている。その後、高専が複眼的なものの見方が出来る技術者を育成していくことを考えていくと、徐々にその意義が合致していくと考えている。また、それを強化すべく教育カリキュラムの構成で目指しているのは、本科及び専攻科を合わせた7年間でカリキュラムを作ることが出来ないかということである。

(委員)

高専は本来の目的から離れ、だんだんと大学化を指向するようになってきた。それがまさに高専でいう本科4年、5年、専攻科であり、大学の4年間に匹敵することになる。準学士課程までの教育と学士教育レベルまでの教育ということで、本科後半の2年、専攻科2年の4年間で、大学並みの技術者養成機関としての評価を受ける。ある種、これは格付けであり、J A B E E 認定されたということは、国際的に通用する工業技術者の養成機関であるということである。これは、高専として選ばなければならない苦しい選択の一つであることから、専攻科の定員を今の倍くらいに増やしてもいいのではないか。

(本校)

高専は、専攻科を修了したからといって、必ずしも学士が取得できるわけではない。学位授与機構の審査を受けて何名かは落ちることがある。高専も高等教育機関といいつつ4年

間の教育をしながら、学士号を与えられない。その点については、高専機構に対しても申し上げている。

(委員)

いっそのこと、7年間としてしまえばよいのではないか。

(本校)

7年間の一貫教育を行うことについては、高専機構には申し上げているが、なかなか取り上げてもらえない状況である。

(委員)

技術者教育の観点からすれば、本来、本科5年の教育について評価されるべきであり、高専そのものが問われるべきであると思うがどうか。

(本校)

高専独自の技術者教育が出来るようなシステムを確立しないといけないと考えている。

(委員)

技術者教育の養成機関である高専こそ J A B E E の趣旨に添った学校であると言える。

J A B E E の評価、自己点検を見た限り、教育システム、授業、あるいはその評価、教職員組織、学習支援、地域社会との連携等、全般的に技術者教育プログラムについては、よくやっているという評価しか出て来ない。なお、専攻科のニーズ、存在意義については社会に対して更に P R する必要がある。

(講 評)

- ・ 教育活動は教育目的に沿って適切に行われている。
- ・ 教育の質を落とさない努力が必要である。
- ・ 英語力に加え、国際感覚及び異文化理解力の向上が必要である。
- ・ 入学後の進路変更（例えば教員志望への変更）への対応も必要である。
- ・ 高専自体、一般市民に広く知られていない状況から、さらなる広報努力が必要である。



外部評価委員会

8. 平成22年度小山工業高等専門学校外部評価に係るヒアリング要旨

日 時： 平成22年9月7日（火）

場 所： 管理棟1階 校長室

議事内容

1. 質疑応答について

瀧澤副校長の進行により、質疑応答と意見交換が行われ、その後講評を得た。

（自己点検評価関係）

○教員間の連携について

（委員）

教員間の連携としての具体例はあるか？

（本校）

一般科目及び専門科目を担当する教員間の連携については、教務委員会において検討した内容を各委員が学科へ持ち帰りフィードバックしている。

平成23年度には、学科間連携推進部会（仮称）を設置し、各学科間の連携を一層密にすることを検討中である。

○教育課程について

（委員）

教育課程全体を企画するという点について具体例はあるか？

（本校）

各学科を連携して、創造性教育のプログラムを立ち上げた。それについて新しい科目、各学科の共通科目を構築することを始めた。

○英語力向上について

（委員）

TOEICの点数について、就職や国際的に活躍するのに必須なので、英語力の向上について努力願いたい。

（本校）

英語力の向上は非常に大きな課題であり、21年度から本校後援会主催で英語の特別講習を実施している。

（委員）

大学では、4年生から大学院へ進学する学生は、英語の論文を読む機会がある。そうすることにより、英語力が向上する。また、留学生や海外の先生とのコミュニケーションを取る機会もある。

（本校）

同様な教育環境が高専においても必要であると考えます。

(委員)

高専の学生は、能力はあるが苦手意識が強い。慣れば英語は上達するはずである。大学院では英語で論文を書く学生が多数在籍する。苦手意識を払拭するチャンスがないだけであり、国際会議等に帯同させることにより変わっていくはずである。

○教員の博士号の取得について

(委員)

博士号の取得率が年々向上している状況であるが、何か学校側の方針があるのではないか？

(本校)

教員の博士号取得については、必ずしも取得しなければならないということではなく、実践歴も評価対象であるが、特に専門科目の教員を採用する場合、博士の学位を取得していることが条件の一つとなっている。また、学科によっては博士の学位以外に技術士等の資格を保有していることを条件とする場合もある。

○シラバスの閲覧について

(委員)

シラバスは、ホームページ等で外部から閲覧できるようになっているか？

(本校)

シラバスは、ホームページ等で外部から閲覧出来るようになっており、各教室にも備えている。

(委員)

その点が確認できたので、該当評価項目についての評価点を3から4に変更する。

○科研費の申請状況について

(委員)

科研費の申請状況はどのようなものか？

(本校)

科研費の申請状況（過去数年間）を基に、毎年、科研費申請の説明会を開催し、申請率の向上に努力している。

教員の研究活動を活発化させるため、予算配分上も学内における競争的資金の拡大を図っており、その経費の申請条件として、前年度における科研費申請を条件としている場合もある。

(J A B E E関係)

○プログラム履修生を決める具体的方法について

(委員)

プログラム履修生を共通教育等の後に決める場合には、その具体的方法が定められ、当該プログラムに係わる教員及び学生に開示されていること。また、それに従って履修生の決定が行われていることが必須であるが、具体的な状況はどうなっているか？

(本校)

本校のプログラムは、本科4年、5年及び専攻科1年、2年の計4年間のカリキュラムで構成されており、本科4・5年生に在学する学生を対象に、事前に技術者教育プログラムとその履修

方法について十分に説明し、理解を得た上で、プログラム履修生を決定している。

○公開授業について

(委員)

P D C A の件で、教員の F D 関係では、評価の高い授業の公開もされているのか？

(本校)

教育改善推進室を中心に、授業における教授方法の改善や向上を目的として、F D の一環による公開授業を実施している。参観者は、見学した授業の優れた点、改善すべき点についてアンケートを提出することとしている。これにより、教員は授業を改善するためのヒントやアイデアを獲得し、教員相互の情報交換を行うことにより教育改善に繋げている。

(講 評)

基本的には、小山高専は、全国高専の中でもレベルが高いと評価できる。

教員も含めて学生の質、教育はスタンダードで安心感のある高専である。

英語力及び異文化理解力の向上には、きっかけが必要である。その一方策として、海外から見れば高専もカレッジであることから、海外、特に英語圏の大学等と交流できる体制作り、インターンシップの海外実施、教員が海外に渡航される際、学生が帯同出来るような制度作り等のため、小山高専と同レベルの海外の教育機関と協定を締結し、学生の相互交流、ホームステイ等を推進することなどが考えられる。



外部評価に係るヒアリング

9. 外部評価用「評価シート(自己点検評価)」集計結果

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目		平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
1章	1-1-①: 目的として、高等専門学校の使命、教育研究活動を実施する上での基本方針、及び養成しようとする人材像を含めた、達成しようとしている基本的な成果等が、明確に定められているか。	5.0	○明確に定められている。 ○評価項目の各々の項目について、学生便覧及び学校要覧に明確に定められている。 ○教育の基本理念「技術者である前に人間であれ」と3項目の教育理念は現状と今後の社会に於けるもっとも大切なことであり、全てがここから始まる。教育方針、教育目標も明確であり、より良い人材が期待される。 ○教育理念、教育方針と育成する人物像が明確に示されている点は評価できる。
	1-1-②: 目的が、学校教育法第115条に規定された、高等専門学校一般に求められる目的から、はずれるものでないか。	4.7	○高等専門学校一般に求められる目的に合致している。 ○目的が学校教育法第115条に規定された高専の目的と一致している。 ○高等専門学校に一般的に求められる規定に基づき、深く専門の学芸を教授し職業に必要な能力の育成の基本が守られている。 ○教育目標は高専の目的に沿っている。各学科・各専攻の教育目標も対応している。
	1-2-①: 目的が、学校の構成員に周知されているか。	4.2	○準学士課程の学生において、教育目標及び教育方針の更なる周知を図りたい。 ○学生便覧、ホームページにより周知されている。 ○教職員、学生に対し種々なる手段をとらえて周知されている。 ○資料配布、説明及びネット等により頻繁に確認できる体制にある。アンケートの結果も成果の効果を表している。
	1-2-②: 目的が、社会に広く公表されているか。	4.0	○小山高専の教育理念・目的は一般に知られていると考えられる。一般的には、公開されていることと、周知されていることとは異なるため、不断の努力を継続されることを期待します。 ○学校と社会との関連の高まりが更に求められて連携の必要性も高くなっているので、受験生や学校向けの更なる一般社会への広報が必要である。 ○今後、更に小山高専の知名度を高める努力をされるとともに、その際、教育理念や教育方針を明確に打ち出されるとよいと思われる。 ○ホームページのアクセス数は1日、1,200件であり、広く好評されていると言える。 ○ホームページのアクセス数や学校要覧の記載が適格である。 ○ロボコンその他の活動で知名度があり、ホームページのアクセス数も増え、目にする機会が多くなることは有効である。また教育目標の公表や説明会等も積極的に対応している。
2章	2-1-①: 学科の構成が、教育の目的を達成する上で適切なものとなっているか。	4.2	○高専の開設以来、社会的需要に対応して、学科の増設、改組などが行われており、適切なものと言える。 ○高等専門学校設置基準に沿っている。 ○学則とカリキュラム概要等により適切である。
	2-1-②: 専攻科を設置している場合には、専攻科の構成が、教育の目的を達成する上で適切なものとなっているか。	4.0	○3専攻科で定員20名ということで機構的にも難しい面も考えられるが、3専攻科の更なる融合生の向上が大切な課題と言える。 ○3専攻科が設置されているが、準学士課程卒業年次生の進路は多様であり、これまでの実績に基づいて現在の定員に落ち着いているものと考えられる。従って適切なものと言える。 ○複合的な専攻を設置され、5学科に対応しながら、高度な専門知識・技術を習得しつつ、幅広い専門知識を習得できる横断的な体制を整備されている。 ○専攻科の構成は学校教育法の規定に適合している。 ○構成・定員、教育目標、学年別配当単位数等により適切である。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目		平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
2章	2-1-③: 全学的なセンター等を設置している場合には、それらが教育の目的を達成する上で適切なものとなっているか。	4.2	○教育の目的を達成する上で、4つのセンター相互間の連携や調整にも留意されるとよいと思われる。 ○図書情報センター、情報科学教育研究センター、地域連携共同開発センター、ものづくり教育研究センターの4組織があり、適切に運営されている。 ○図書情報センター、情報科学教育研究センター、地域連携共同開発センター、ものづくり教育研究センターの4つのセンターは各々の目的を十分達成している。 ○4つのセンターが相互に連携して有効に活用されている。 ○各センターとも適切に機能している。特に地域連携共同開発センターは産学官連携ネットワークにより地域との密接な関係を築いている。 様々なプロジェクトに於いての発表の機会や活動を通して、技術面ばかりではなく企業や広く社会との視野が広がり、教育との目標を達成する上できわめて適切なものとなっている。
	2-2-①: 教育課程全体を企画調整するための検討・運営体制及び教育課程を有効に展開するための検討・運営体制が整備され、教育活動等に係る重要事項を審議するなどの必要な活動を行っているか。	4.0	○PDCAのサイクルが閉じているでしょうか。 ○準学士課程については教務委員会が、専攻科については専攻科委員会が設置され、教育課程全体の企画調整機関となっている。またこの組織で協議された結果は、運営会議に上程され、実施に向けた決議が行われている。 ○準学士課程における教務委員会、専攻科課程における専攻科委員会が十分機能している。 ○教務委員会、専攻科委員会等に於いて適切に運営審議されている。
	2-2-②: 一般科目及び専門科目を担当する教員間の連携が、機能的に行われているか。	3.8	○PDCAのサイクルが閉じているでしょうか。 ○常設組織はないが、教務委員会を中心に必要に応じて協議が行われている。しかし今後に向けて、特に上級学年に配置されている専門科目の理解度を向上させる上においては、理数系科目等を中心に、学科目連絡員等の制度により、専門教育課程が望む理数教育等の整合を図ることも考えられよう。 ○ある程度常設的な組織も検討されたい。 ○教職員間の連携は機能的に行われているが、常設的な組織化にも更なる連携向上が望みたい。 ○一般科目と専門科目担当者との連携は今後更に必至と思われる。教務委員会を中心に必要に応じて対応しているようですが、常設組織が出来れば問題点が更に浮上してくると思う。高専としての一番難しいところを考える。
	2-2-③ 教育活動を円滑に実施するための支援体制が機能しているか。	4.3	○一般科会議、各専門学科会議、学生支援室、学生課によって、支援が推進されている。また、クラス担任、カウンセラー等による学生の相談が緊密に行われている。昨今の学生達は精神的な問題を抱えることが増えているので、今後相談業務が更に必要となろう。 ○教育活動全般について幅広い機能的な支援が行われている。 ○全般に機能的な支援が行われている。
3章	3-1-①: 教育の目的を達成するために必要な一般科目担当教員が適切に配置されているか。	3.7	○教養教育、工学基礎教育を推進するために必要な教員は、常勤23名、非常勤29名により、適切に配置されている。今後は国際的なコミュニケーション能力の向上、国際感覚の醸成上、外国語教育のグレードアップが必要とされている。 ○英語力のUpを期待しております。 ○国際感覚の育成に更に努めて欲しい。 ○コミュニケーション能力、グローバル社会に於ける国際感覚の向上が求められているが、社会環境の変化に適切な対応に努力することが大切。 ○外国語においてもう少しネイティブスピーカーの教員がいた方がよいと思われる。 ○各専門分野に沿って適切に配置されている。
	3-1-②: 教育の目的を達成するために必要な各学科の専門科目担当教員が適切に配置されているか。	4.7	○専門教育を推進するのに必要な能力を持った教員が、高専の教育目標、教育システム遂行上十分な形で配置されている。 ○適切に配置されている。特に博士号取得者が多い。 ○全ての学科において博士号取得者及び実務関連資格者が適切に配置されている。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目		平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
3章	3-1-③: 専攻科を設置している場合には、教育の目的を達成するために必要な専攻科授業科目担当教員が適切に配置されているか。	4.7	○専攻科教育を推進するのに十分な能力を持つ教員が配置されている。 ○各々の専攻科に応じて適切な配置がされている。(例)デザイン能力養成には実務経験者、高度な研究能力育成には各分野の博士号取得者 ○非常勤の実務経験者、学士、技術士を配置し適切である。 ○専門の専任教員及び博士号取得者、資格者による専門分野に対応している。
	3-1-④: 学校の目的に応じて、教員組織の活動をより活発化するための適切な措置が講じられているか。	3.8	○教員のバランス、公募、顕彰等が適切に行われている。今後さらに望むところがあるとすれば、女性教員(現在6名)がもう少し増えてもよいのではないか。 ○博士の学位の取得率を上げる努力を継続されることを期待します。 ○55歳以上の教員比率が約33%と高く、今後若手教員の採用が必要と考えられる。 ○教員の年齢構成の均衡の必要性。教員の公募要綱に示された内容の検討を常に前向きに行うこと。 ○優秀教員評価制度等により教員の配慮を行っている。
	3-2-①: 教員の採用や昇格等に関する規定などが明確かつ適切に定められ、適切に運用がなされているか。	4.0	○人事委員会規程、教員選考委員会規程、教員選考規則が定められ、採用、昇格人事が適切に行われている。また新規採用は公募によって行われており、適切である。 ○平成16年度から21年度に採用された教員24名のうち、21名が博士の学位を持つなど、教員の採用は適切に行われている。 ○規則は適切に運用されている。
	3-2-②: 教員の教育活動に関する定期的な評価を適切に実施するための体制が整備され、実際に評価が行われているか。また、その結果把握された事項に対して適切な取組がなされているか。	4.0	○点検評価委員会が点検評価規程等により自己点検報告書を作成している。これら外部評価に対応する自己点検と、教員自らによる自己評価、学生による授業評価アンケート等が授業改善のための資料となる。授業改善について教育改善推進室が中心となり、改善のための活動を行っている。この中で教員の自己評価書提出実績における得点が低いのが気になる。 ○教員の自己評価をはじめ、授業アンケートなど適切な評価が行われていると評価できる。 ○「学生による授業評価報告書」などにより適切に取り組みされている。 ○教育改善推進室のアンケートや教員自己評価を、点検評価委員会による総括的な評価により教員表彰等の取り組みがなされている。
	3-3-①: 学校において編成された教育課程を展開するために必要な事務職員、技術職員等の教育支援者が適切に配置されているか。	4.0	○教育課程を円滑に遂行する為に必要な教育支援者であり、常にその存在と重要性を強く認識していることが大切。 ○事務職員・技術職員は適切に配置されている。 ○事務職員、技術職員とも各々の規程によって教育支援者が適切に配置されている。 ○各規定により適切に配置されている。 ○事務職員、技術職員の採用、異動はどのように行われているのか。
4章	4-1-①: 教育の目的に沿って、求める学生像や入学者選抜の基本方針などが記載された入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)が明確に定められているか。また、将来の学生を含め社会に公表されているか。	4.5	○アドミッションポリシーは明確に示され、ホームページにも明示されている。また学生募集活動、入試相談等にも示されている。 ○各々要項及びホームページ等により明確に定められ、周知されている。 ○入学者受入方針が明確であり、多様な手段で公表している。
	4-2-①: 入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)に沿って適切な学生の受入方法が採用されており、実際の入学者選抜が適切に実施されているか。	4.2	○障害を持つ学生が入学にあたって不利にならないように留意する必要がある。 ○適切に実施されている。 ○学力選抜においては「傾斜配点」、推薦選抜では質問内容に入学者受入方針を反映させている。 ○入学者受入方針に沿い、入学者選抜方法を採用し実施されている。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目		平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
4章	4-2-②: 入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)に沿った学生の受入が実際に行われているかどうかを検証しており、その結果を入学者選抜の改善に役立っているか。	4.2	○学力選抜と推薦選抜の間で入学者に学力差は存在するかを検証してみるとよいと思われる。 ○入学者対策室と教務委員会により問題点が点検され、改善策が検討されている。 ○入学者対策室及び教務委員会において検証が行われ、その結果により改善策がとられている。 ○アンケート及び入学者対策会議、教務委員会により検証、改善している。
	4-3-①: 実入学者数が、入学定員を大幅に超える、又は大幅に下回る状況になっていないか。また、その場合には、これを改善するための取組が行われるなど、入学定員と実入学者数との関係の適正化が図られているか。	4.0	○専攻によって入学者数が定員の2倍に達した年度があったとのことであるが、検証が必要である。 ○適切である。 ○入学者の確保は学校経営、教育推進上で最重要課題であり常に高い認識が大切。 ○概ね適正である。
5章	5-1-①: 教育の目的に照らして、授業科目が学年ごとに適切に配置され、教育課程が体系的に編成されているか。また、授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿って、教育の目的を達成するために適切なものになっているか。	4.2	○他の高専と比べた場合の特徴等があれば、具体的な記載があるとよい。 ○学科目の種類・学年別配置は適切である。またステップアップする教育システムについても適切に構築されている。 ○低学年・高学年の違いに応じて適切な編成になっている。 ○低学年から高学年への教科が段階的に配置され適切な配慮がなされている。 ○一般科目、専門科目の学年別単位配置は、高学年に専門科目を増やす体系であり、教育目標を達成する流れとなっている。
	5-1-②: 学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に対応した教育課程の編成に配慮しているか。	4.0	○全学的なインターンシップの指導の向上が大切である。 ○他大学との単位互換、遠隔授業、eラーニング、インターンシップ、資格取得支援等の規程が明文化され、時代の要請に対応した運用がなされている。 ○学校では得られない実務経験の機会として、インターンシップなどを実施している。 ○他大学との単位認定規定及びインターンシップ規定により、単位取得者が出てきている。目標には達していないが、編成に配慮している。
	5-2-①: 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態のバランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。	4.3	○準学士課程の5年間について、講義・演習・実験・実習が適切に設けられている。 ○授業形態のバランスをとるために、教材やコンピュータの活用等工夫をしている。 ○教材の工夫、授業の工夫がなされている。継続的な収集をして教育の工夫に取り組んでいる。
	5-2-②: 教育課程の編成の趣旨に沿って、適切なシラバスが作成され、活用されているか。	3.5	○シラバスの準備公開には問題は無いのだが、学生達のアンケートではシラバスを活用していない例も少なからず見られ、今後の課題と言える。 ○いつでもどこからでも手軽にシラバスの閲覧がしやすくなる方策を考えるなどの対策も必要ではないでしょうか。 ○適切なシラバスの作成と活用に努めているが、更なるシラバスの利用向上が望まれる。 ○シラバスの利用向上への対策。 ○学生のシラバスの利用が必ずしも高くない理由について検討してみようか。 ○教員による適切なシラバスは作成されている。学生の活用度合いが低いが少しずつ向上している。
	5-2-③: 創造性を育む教育方法(PBLなど)の工夫やインターンシップの活用が行われているか。	3.8	○ものづくり、PBL、創造性教育の重要性が認識され、教育現場に反映されている。また学生の学外活動についても意識されている。 ○卒業研究などにおいて、創造性を育む教育が行われている。 ○卒業研究の学会発表、インターンシップ報告会の開催により、機会を設け活用している。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目	平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
5-3-①: 成績評価・単位認定規定や進級・卒業認定規定が組織として策定され、学生に周知されているか。また、これらの規定に従って、成績評価、単位認定、進級認定、卒業認定が適切に実施されているか。	3.8	○成績評価については学生便覧、キャンパスライフに明示され、厳正に実施されている。学生からの異議申し立ての制度もあり、全教員による及落判定会議が行われている。 ○卒業の認定は規程に定められており、学生便覧にも記載されている。 ○全教員参加を原則とする学業成績の評価並びに学年課程修了や卒業認定の規定の厳正実施は評価できる。 ○学年課程修了及び卒業認定等の規定が明確に定められており、周知され適切に実施されている。
5-4-①: 教育課程の編成において、特別活動の実施など人間の素養の涵養がなされるよう配慮されているか。	4.2	○国際感覚を高めるために「異文化理解」などの授業あるいは、関連した講演会などを行って学生に受講させること、交換留学の制度を充実することなどもよいのではないか。 ○学内の年間行事、低学年生に対するホームルーム、高学年生に対する特別科目が設けられている。 ○HRの時間の設定や様々な場面において、技術者の倫理観の涵養につとめている。 ○全教科での人間性素養の涵養への配慮が認められる。 ○球技大会、工陵祭等の行事や工場見学により、心身鍛錬及び実社会における技術検分の機会を設けている。
5-4-②: 教育の目的に照らして、生活指導面や課外活動等において、人間の素養の涵養が図られるよう配慮されているか。	4.3	○教育理念を達成するために、学生会を構成する、文化部・運動部・同好会・愛好会等が組織され、課外活動を行っている。また学生支援室は学生の相談業務を行っている。 ○学生支援室の設置及びカウンセラーの来校など、きめ細かい努力が認められる。 ○人間の素養の涵養に常に意が注がれている。 ○学生会の各部活動の参加により「人間性」「感性」が高まってきている。 ○学生のアンケートで評価が上がっていることは好ましい。
5章 5-5-①: 準学士課程の教育との連携を考慮した教育課程となっているか。	4.0	○準学士課程と専攻科による「JABEE受審プログラム」が組み立てられており、この関係からも接続性が意識され、整備されている。 ○本校の技術者教育プログラムは、日本技術者教育認定機構によって、準学士課程4年から専攻科課程に至る一貫した教育として認定されている。 ○「技術者教育プログラム」により連携を考慮している。
5-5-②: 教育の目的に照らして、授業科目が適切に配置され、教育課程が体系的に編成されているか。また、授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿って、教育の目的を達成するために適切なものになっているか。	4.3	○専攻科の目的に沿って、科目配置は適切に行われている。また他分野の科目履修も行えるようになっている。 ○適切に配置され、体系的に編成されている。 ○教育目標を達成するための授業科目の流れや必修科目のシラバスにより、体系性を持ち構築されている。
5-5-③: 学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に対応した教育課程の編成に配慮しているか。	4.3	○入学後の学科の変更や進路の変更希望に対する対応及び支援はどのようになっているか。たとえば、理科の教員(中学・高校)になりたい学生が出てきた場合、どのように対応しているか。 ○他専攻の科目履修、大学コンソーシアムとちぎに参加して行われる他大学との単位互換、インターンシップの推進などにより配慮している。 ○宇都宮大学との単位互換協定やインターンシップの単位認定など努力している。 ○大学コンソーシアムや実務研修による貴重な機会を設けている。
5-6-①: 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態のバランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。	4.3	○実験・演習科目により構成される「特別研究」が重要視されており、バランスの取れた授業形態が構築されている。 ○実験、実習科目の「特別研究」を重視しているなど工夫している。 ○特別研究を中心に授業形態のバランスが適切であり、授業の達成目標に合わせた担当教員の工夫がみられる。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目		平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
5章	5-6-②: 創造性を育む教育方法の工夫やインターンシップの活用が行われているか。	4.3	○全専攻共通のプロジェクトデザイン、建築学専攻の街区設計をエンジニアリングデザインと位置付けている。またインターンシップの結果は活用されている。 ○全専攻共通で実施している専門科目「プロジェクトデザイン」などにその取り組みが見られる。 ○創造性を育む授業内容に配慮がなされ授業形態も種々工夫がなされている。 ○プロジェクトデザインの実施により創造性教育の工夫がみられる。 ○インターンシップなどが積極的に実施されている点は評価できる。
	5-6-③: 教育課程の編成の趣旨に沿って、シラバスが作成され、事前に行う準備学習、教育方法や内容、達成目標と評価方法の明示など内容が適切に整備され、活用されているか。	4.2	○シラバスは詳細に準備・公開されている。 ○全教員が教育課程に沿って適切なシラバスの作成と活用を行っている。 ○非常勤講師を含めた全教員が教育課程に沿った適切なシラバスの作成と活用を行っている。学生にも分かりやすい評価が行われている。
	5-7-①: 専攻科で修学するにふさわしい研究指導が行われているか。	4.2	○専攻科担当教員による研究テーマの相談、技術職員等による助言・指導等が適切に行われ、成果の発表・評価も適切である。 ○「特別研究」の多くの研究成果が学会等で発表されるなど研究指導の内容が示されている。 ○特別研究の研究テーマを指導教員と学生が決定している。多くの研究成果が学会等で発表されている。
	5-8-①: 成績評価・単位認定規定や修了認定規定が組織として策定され、学生に周知されているか。また、これらの規定に従って、成績評価、単位認定、修了認定が適切に実施されているか。	4.2	○専攻科の授業科目の履修等に関する規程が定められ、学生便覧に明示されている。 ○規程が策定され、学生便覧に記載されている。これらに従い修了認定の判定会議も全教員参加で行われている。 ○規定も明確になされ学生への周知もよくなされている。 ○授業科目の履修に関する規定、判定会議により適切に実施されている。
6章	6-1-①: 高等専門学校として、その目的に沿った形で、課程に応じて、学生が卒業(修了)時に身に付ける学力や資質・能力、養成する人材像等について、その達成状況を把握・評価するための適切な取組が行われているか。	4.2	○教育目標として、準学士課程・専攻科課程のいずれについても、「達成すべき教育目標」に明記されている。このチェックは一定の判定基準のもとに審議・評価され、質の保証を行っている。 ○シラバスにおける明記、準学士課程卒業時と専攻科課程修了時には達成度が審議されている。 ○教育方針の育成する人材像に関する記述や判定会議等により適切な取り組みが行われている。
	6-1-②: 各学年や卒業(修了)時などにおいて学生が身に付ける学力や資質・能力について、単位修得状況、進級の状況、卒業(修了)時の状況、資格取得の状況等から、あるいは卒業研究、卒業制作などの内容・水準から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。	4.0	○退学者の退学理由はどのようなものか、それに応じた対応はなされているか。 ○準学士課程の進級率、退学率を見ると、退学率は低いものの、学科によっては約1割が進級できないケースが見られる。また専攻科課程では建築学専攻の修了率がやや低い。 ○学会発表なども積極的にされていて評価できる。 ○準学士課程では90%以上の進級、また専攻科課程での資格の取得等により成果は上がっていると考えられる。 ○準学士課程、専攻科課程とも進級状況、修了率、資格取得、卒業研究、学会発表において成果や効果が上がっている。
	6-1-③: 教育の目的において意図している養成しようとする人材像等について、就職や進学といった卒業(修了)後の進路の状況等の実績や成果から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。	4.7	○良好である。 ○求人倍率が高く、就職率と進学率が極めて高いことで、教育の効果は十分上がっていると考えられる。 ○就職、進学実績にて評価される通り、教育成果は高いものがある。 ○就職率が高く、専門分野への方向の進学があり、教育の成果や効果が上がっている。 ○近年の新卒者の厳しい就職状況のなか、卒業生の進路の実績をみると大変評価できる。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目		平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
6章	6-1-④: 学生が行う学習達成度評価等、学生からの意見聴取の結果から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。	3.7	○英語教育、国際情勢の理解等について更に努力する必要がある。 ○アンケート調査によると自然科学系や専門科目で、5段階評価のポイントが高いが、ポイントの低い国際感覚も改善すべきと考える。 ○英語力の向上等に更なる努力が望まれる。 ○経済のグローバル化が進んでいるなか、国際感覚や英語の学力向上にもう少し力を入れるべきであろう。 ○英語の学力、国際感覚がやや低いが、概ね成果が上がっている。
	6-1-⑤: 卒業(修了)生や進路先などの関係者から、卒業(修了)生が在学時に身に付けた学力や資質・能力等に関する意見を聴取するなどの取組を実施しているか。また、その結果から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。	4.2	○アンケート調査だけでなく関係者から聴取することも必要である。 ○近年大学進学率が高水準となっているなかで、一般の大卒者のレベルが低下し、相対的に少人数できめ細かな教育を実施している高専の評価が上がっている面もあると思われる。今後とも教育の成果の向上に向け努力していただきたい。 ○概ね良好である。 ○就職先、進学先、インターンシップ受け入れ先に対して、アンケートを実施するなど教育成果や効果の把握に積極的に努めていると評価できる。 ○企業、大学等のアンケート結果により教育の成果が上がっている。
7章	7-1-①: 学習を進める上でのガイダンスが整備され、適切に実施されているか。また、学生の自主的学習を進める上での相談・助言を行う体制が整備され、機能しているか。	4.2	○新入生に対するガイダンス、オフィスアワー、卒業時ガイダンス等が適切に実施されている。 ○ガイダンスが整備されてすばらしい。 ○ガイダンス、説明会の実施等整備、機能している。
	7-1-②: 自主的学習環境及び厚生施設、コミュニケーションスペース等のキャンパス生活環境等が整備され、効果的に利用されているか。	4.0	○学内環境として、図書情報センター、情報科学教育研究センター、ものづくり教育研究センターが設けられ、指導体制も整っている。学生の自主的学習環境は良好であり、これらセンターの利用も活発である。 ○それぞれ各センターの施設・整備が充実しており、効果的に利用されている。 ○施設、設備が整っている。
	7-1-③: 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されているか。	4.2	○クラス担任によりホームルーム等を通じて把握されている。 ○各懇談会等によりニーズの把握がされている。 ○授業評価アンケート、学生会との懇談会等を実施している。
	7-1-④: 資格試験や検定試験受講、外国留学のための支援体制が整備され、機能しているか。	4.0	○資格試験・検定試験、留学が単位化され、制度として整えられている。 ○資格試験等の受験指導も行われ、支援体制は機能している。 ○補習授業や留学規則、海外研修募集による支援をしている。
	7-1-⑤: 特別な支援を行うことが必要と考えられる者への学習支援体制が整備されているか。また、必要に応じて学習支援が行われているか。	4.2	○留学生在が19、20、21年度と人数が減少してきている理由を検討されているか。 ○まず前提として、高専の入学生は既に一定のレベルにあることから、クラス担任による学習・生活指導が中心となっている。留学生については留學生相談員が対応している。編入生に対する配慮も行われている。 ○留学生及び編入学生についても適切な指導が行われている。 ○留學生相談員指導報告書や編入学生指導、留學生懇談会を開催し整備、支援している。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

	評価項目	平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
7章	7-1-⑥: 学生のクラブ活動や学生会等の課外活動に対する支援体制が整備され、機能しているか。	3.8	○クラブ活動や学生会等の課外活動への学生の参加度合いはどうか。また、それらの活動と勉学との両立は達成されているか。 ○学生会に所属する体育・文化クラブの活動が主体であるが、全クラブに指導教員が配置されている。 ○学生のクラブ活動や学生会等に対して、物、心両面のサポートが行われている。 ○学生のクラブ活動において一部、設備や支援が不足している部活もある。
	7-2-①: 学生の生活や経済面に係わる指導・相談・助言を行う体制が整備され、機能しているか。	4.0	○日本経済の低成長が続くなかで、経済的理由から退学、あるいはアルバイト等のため勉学に影響が生じている学生がでてきていないか。 ○学生会、学生支援室により適切な指導・相談・助言が行われている。また非常勤のカウンセラーによるメンタル面の相談が行われている。 ○生活面において学生会、クラス担任、学生支援室が対応している。経済的支援についても授業料免除制度を整備している。 ○社会環境の変化は学生生活面(経済面、健康面etc)に大きな影響もあり、学生生活を円滑に行うための大切なことであるので常にきめ細かな配慮が大切である。 ○学生会、クラス担任、学生支援室、カウンセラー、厚生補導研究会、授業料免除制度の整備等により機能している。
	7-2-②: 特別な支援を行うことが必要と考えられる者への生活支援等を適切に行うことができる状況にあるか。また、必要に応じて生活支援等が行われているか。	3.8	○留学生、寮入寮者への支援体制は整備されている。しかし昨今の経済情勢悪化に伴う、学生への経済的支援については不明である。 ○現在は障害をもつ学生は在籍していないようであるが、障害をもつ学生に対する対応はハード面だけでなく、学生による学生のサポートなどソフト面の取組みも必要である。 ○留学生及び障害を持つ学生への支援体制が整備されている。 ○留学生に対する教職員及び寮生の支援、障害を持つ学生へのバリアフリー化により支援している。
	7-2-③: 学生寮が、学生の生活及び勉学の場として有効に機能しているか。	3.8	○学生寮の設備は整っており、勉学の場として有効に使われている。しかし入寮者数がここ数年減少傾向にある。 ○生活の場としてはもちろん、他の場としても機能している。 ○日常の生活に必要な設備の整備他、談話室の設置による学習指導が行われている。
	7-2-④: 就職や進学などの進路指導を行う体制が整備され、機能しているか。	4.3	○5学年のクラス担任が専ら指導に当たっており、進路支援室が設けられている。 ○就職率ほぼ100%から見ても体制は十分機能している。 ○進路支援室の設置及びクラス担任の直接指導や就職ガイダンス、進学説明会の開催等により、毎年ほぼ100%の就職率を維持している。
8章	8-1-①: 学校において編成された教育課程の実現にふさわしい施設・設備が整備され、有効に活用されているか。また、施設・設備のバリアフリー化への配慮がなされているか。	4.3	○施設整備状況は良好であり、学生の満足度も高い。 ○「施設満足度アンケート結果」から判断して有効活用されており、バリアフリー化についても十分な配慮がされている。 ○多数の施設・設備が整備され、バリアフリー化の配慮もなされている。
	8-1-②: 教育内容、方法や学生のニーズを満たす情報ネットワークが十分なセキュリティ管理の下に適切に整備され、有効に活用されているか。	4.5	○情報科学教育研究センターが専らこの任に当たっており、技術職員も配置されている。セキュリティ管理も適切に行われている。 ○「小山工業高等専門学校情報セキュリティポリシー」に基づき管理活用されている。 ○高速ネットワークにより情報交換が行われている。情報セキュリティポリシーによる安全性の管理で運用されている。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目		平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
8章	8-2-①: 図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料が系統的に整備され、有効に活用されているか。	4.5	○図書情報センターには77,000冊の書籍が所蔵され、内約16,000冊は研究用図書として研究室にある。またネットワークにより他大学図書館との連絡も可能になっている。 ○必要な資料がよく整備され、活用されている。 ○図書情報センターにおいて、学生の要望が反映される図書購入をしている。学外者にも開放され有効に活用されている。
9章	9-1-①: 教育の状況について、教育活動の実態を示すデータや資料が適切に収集・蓄積され、評価を適切に実施できる体制が整備されているか。	4.2	○教育改善推進室に資料がストックされている。またこのデータは教務委員会へ報告され、教育点検システムに利用される。 ○データや資料がよく収集・蓄積され、評価可能な体制になっている。 ○年間計画に基づいて収集・蓄積され、教育改善推進室及び教務委員会が連携し評価している。
	9-1-②: 学生の意見の聴取が行なわれており、教育の状況に関する自己点検・評価に適切な形で反映されているか。	4.3	○学生の授業評価の結果が学生自身の授業への取り組み方の改善につながるような方策も考えられるとよい。 ○学生の教育評価アンケートは実施方法が改善され、アンケート実施から教員へのフィードバックは1ヶ月に短縮された。 ○様々な角度からの聴取がなされており、反映もされている。 ○学生による授業評価アンケートの報告を受け、自己点検評価報告を行っている。
	9-1-③: 学外関係者の意見が、教育の状況に関する自己点検・評価に適切な形で反映されているか。	4.2	○卒業生の就職先、進学先だけでなく近隣地域住民の小山高専の学生に対する評価や意見も取り入れ、教育の向上につなげることを考えられてよい。 ○実施されているが、その具体的効果は今後に期待される。 ○自己点検評価報告書の中に、学外者の意見が記述されている。 ○学外者による教育に関するアンケートの報告を受け、自己点検評価報告を行い改善し反映している。
	9-1-④: 各種の評価の結果を教育の質の向上、改善に結び付けられるようなシステムが整備され、教育課程の見直しなど具体的かつ継続的な方策が講じられているか。	4.0	○教育改善推進室での検討、教務委員会での改善策検討、これを教育点検システムに反映させ、改善に結びつけていく。 ○教育改善推進室を中心にシステムが整備されている。 ○授業アンケートを基に教育改善推進室を中心に学科会議、教務委員会において教育課程の見直しと具体的、継続的な方策を講じている。
	9-1-⑤: 個々の教員は、評価結果に基づいて、それぞれの質の向上を図るとともに、授業内容、教材、教授技術等の継続的改善を行っているか。また、個々の教員の改善活動状況を、学校として把握しているか。	3.8	○個々の教員はFD年間計画に基づいて、3月にFDアクションレポートを提出する。教員のFD活動状況はこれにより全学で共有できている。但し教育改善は一朝一夕に完成するものではないので、更に改善が求められる。 ○授業評価アンケートの結果により、質の向上を図っている。 ○授業評価アンケートの結果をFDアクションレポートにより改善状況を把握している。
	9-1-⑥: 研究活動が教育の質の改善に寄与しているか。	4.3	○教員の学位取得状況が高く、活発な研究活動が行われている。また5年生の卒業研究、専攻科の特別研究は教員と学生が一体となって行うもので、教育の質向上に直接的に寄与している。 ○教員の研究活動は卒業研究や特別研究として役立っている。 ○教員の研究活動や教育改善の論文の発表により、学生の学外発表の質の高い改善に寄与している。
	9-2-①: ファカルティ・ディベロップメント(FD)について、組織として適切な方法で実施されているか。	4.0	○FDは、学生による評価、同僚による評価、自己評価、教育改善研修会という重厚な評価を行っている。また指摘された結果はFDアクションレポート提出により改善策を示している。 ○FD年間計画が教員に配布され適切に運用されている。 ○学外の研修会への参加が増え意識が高まっている。 ○FDは体系的になされているように思われる。
	9-2-②: ファカルティ・ディベロップメント(FD)が、教育の質の向上や授業の改善に結び付いているか。	4.0	○教育の質向上や授業の改善に結びついている。 ○学会誌への研究論文発表等から結び付いていると考えられる。 ○学生による授業評価アンケートの結果の変遷においても徐々に改善に結びついている。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目	平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
10-1-①: 学校の目的に沿った教育研究活動を安定して遂行できる資産を有しているか。また、債務が過大ではないか。	4.5	○財務状況は良好である。 ○資産は政府から独立行政法人国立高等専門学校機構に出資され、本校が管理している。債務はないとのこと。 ○安定的な教育・研究活動を遂行するための資産を保有している。債務なし。
10-1-②: 学校の目的に沿った教育研究活動を安定して遂行するための、経常的収入が継続的に確保されているか。	3.8	○運営費交付金が毎年減額とのことであるが、どの程度の減額か。また、外部資金受入れを増やすため、具体的にどのようなことを考えているか。 ○財務状況は健全である。しかしながら補助金が減額される状況の中で、外部資金獲得が更に必要となっている。 ○今後は更なる外部資金獲得が必要である。 ○運営費交付金や補助金に対する考え方が変化しており、実績や社会貢献、社会連携等の評価が重視されてきているので常に認識を強く持つことが大切。 ○現状は運営費交付金により確保されている。毎年減額されている状況にあり今後の収入源確保が課題。
10-2-①: 学校の目的を達成するための活動の財務上の基礎として、適切な収支に係る計画等が策定され、関係者に明示されているか。	4.3	○計画等が適切に策定され、関係者に明示されている。 ○計画も策定され、関係者に明示されている。 ○適切に明示している。
10-2-②: 収支の状況において、過大な支出超過となっていないか。	4.2	○収支は均衡している。 ○過大な支出とはなっていない。 ○高専機構会計規則に基づき予算執行しており過大支出超過はない。
10-2-③: 学校の目的を達成するため、教育研究活動に対し適切な資源配分がなされているか。	4.2	○教育研究活動は施設・設備の面だけではないと考える。 ○校内予算配分方針を定め、教育研究活動に必要な経費を確保している。 ○環境整備委員会等において効率的な配分に努めている。
10-3-①: 学校を設置する法人の財務諸表等が適切な形で公表されているか。	4.2	○小山高専だけの財務諸表は公表されていないということか。 ○高専機構として統一された財務会計システムに基づいた財務会計処理が行われている。 ○財務諸表の公表は規定どおり行っている。 ○高専機構会計規則に基づき財務諸表を作成し公表している。
10-3-②: 財務に対して、会計監査等が適正に行われているか。	4.2	○小山高専のみについて外部の会計監査等を受けているか。 ○適切である。 ○規則により行っている。 ○内部監査、監査法人、会計検査院の監査を受けている。
11-1-①: 学校の目的を達成するために、校長、副校長、校長補佐、委員会等の役割が明確になっており、校長のリーダーシップの下で、効果的な意思決定が行える態勢となっているか。	4.3	○各職格の役割は明確になっており、校長の命令系統ははっきりしている。 ○規程により役割が明確になっており、校長のリーダーシップにより効果的な意思決定が行われている。 ○効果的な意思決定が行われている。
11-1-②: 管理運営に関する各種委員会及び事務組織が適切に役割を分担し、効果的に活動しているか。	4.3	○委員会等が多数つくられているので、その運営の効率化と委員会相互の連携、情報共有などにさらに留意する必要がある。 ○学校運営上十分な委員会が組織され、明確な役割分担のもと活動している。 ○規程により行っている。 ○効果的に活動している。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目		平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
11章	11-1-③: 管理運営の諸規定が整備されているか。	4.3	○整備されている。 ○諸規程が十分に整備されている。 ○整備されている。
	11-2-①: 外部有識者の意見が適切な形で管理運営に反映されているか。	4.3	○学校運営に関して、参与会、外部評価委員会を設置し、その意見を学校運営に反映している。 ○規程により、外部有識者の意見が適切に反映されている。 ○適切に反映されている。
	11-3-①: 自己点検・評価及び第三者評価が高等専門学校活動の総合的な状況に対して行われ、かつ、それらの評価結果が公表されているか。	4.3	○実施され、公表されている。 ○点検評価規程に基づき行われ、結果についても公表されている。 ○評価結果が公表されている。
	11-3-②: 評価結果がフィードバックされ、高等専門学校の目的の達成のための改善に結び付けられるようなシステムが整備され、有効に運営されているか。	4.3	○自己点検評価・第三者評価は公表され、改善が必要な事項は各委員会で検討している。 ○評価結果がフィードバックされ、改善のためのシステム整備もされている。 ○教育点検システム及び改善システムにより運営されている。
12章	12-1-①: 高等専門学校の研究の目的に照らして、研究体制及び支援体制が適切に整備され、機能しているか。	4.5	○研究活動の3つの目標を定め、各分野の教員はそれぞれの研究目標を明確にして、研究を進めている。また地域連携共同開発センターは教育研究活動の支援を行っている。 ○地域連携共同開発センターが中心となって行っている。 ○支援体制が整備され有効に機能している。
	12-1-②: 研究の目的に沿った活動の成果が上げられているか。	4.5	○科学研究費への申請状況はいかがでしょうか。 ○教員個々、学生との共同による研究成果があるが、それぞれの分野で成果をあげている。 ○論文の数や国際会議と国内学会の口頭発表の数などから判断して、成果は上がっている。 ○研究成果、論文等の発表件数が増えている。教育への還元及び地域社会への還元において十分な成果が上げられている。 ○成果が上がっているように見受けられる。
	12-1-③: 研究活動等の実施状況や問題点を把握し、改善を図っていくための体制が整備され、機能しているか。	4.0	○各教員の研究発表状況を人事係で収集、研究紀要に掲載している。 ○研究業績一覧を研究紀要に掲載している。 ○改善の取り組みがなされている。
13章	13-1-①: 高等専門学校の教育サービスの目的に照らして、公開講座等の正規課程の学生以外に対する教育サービスが計画的に実施されているか。	4.3	○計画的に実施されている。 ○毎年公開講座等が増加している。その他「理科教育支援プロジェクト」を実施している。 ○公開講座、出前授業、施設の開放等地域に対しての教育サービスが実施されている。
	13-1-②: サービス享受者数やその満足度等から判断して、活動の成果が上がっているか。また、改善のためのシステムがあり、機能しているか。	4.3	○活動の成果は上がっている。 ○アンケート調査の結果は95%を超える高い満足度を示している。 ○受講者満足度アンケートの調査結果は高い満足度であり、今後も地域連携共同開発センターにより改善策が協議されている。 ○アンケート結果等からみて成果が上がっているように感じられる。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目		平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
14章	小山高専中期計画の達成状況	4.3	○中期計画は非常に多岐にわたっている。その期(あるいは年度)に小山高専としてとくに重点をおいて取り組む課題と目標を明確にされるとよいのではないか。 ○達成途上にある。 ○概ね達成されている。

総合評価(5段階評価における) 平均評価点(*)	4.2	(自己点検評価報告書全般についてのご意見、アドバイスなど)
<p>1. 小山工業高等専門学校全体について 高専は昭和36年の「高専法」施行により成立し、小山高専は昭和40年に開設された。工業高専の求められたことは、新しい学校教育制度の中で、工業高校でもなく、大学工学部でもない、特徴ある技術者養成の学校教育機関として位置づけられ、教育研究が進められてきた。 小山高専においては45年の歴史の中で、その役割を十分果たされ、有能な人材を社会へ送り出してきたことと推察する。</p> <p>2. 高専の変貌に対する認識 平成11年に専攻科が設置され、この後、準学士課程卒業生の、就職・専攻科進学、技術科学大学をはじめとする大学への編入、専攻科卒業生の大学院進学など、多様化が始まったと考えられる。これは高専卒業生の進学意欲に対応するものであった。 即ち、昭和36年の高専法以後、工業高専の本来の設置目的である、優秀な中堅技術者の育成が次第に変貌し、大学工学部並の教育システムと設備等環境整備を進める結果になったものと解釈できる。高校生の年代から学校へ受け入れ、技術者教育、学士教育を平行して行わなければならない点が、高専の大きな課題なのだと思う。</p> <p>3. 小山工業高等専門学校の整備状況 ① アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、デュプロマポリシーの全てにわたって、明確な方針が策定され、実施されている。 ② 明確な教育目標に従って、整然と教育が行われている。 ③ 教育推進、学生管理・支援、教育改善、学生課外活動、国際交流、環境整備、その他の学内管理運営に必要な各種委員会及びその推進組織が確立されている。 ④ 学内の設備等、環境整備も的確に行われている。</p> <p>4. 全体的にみた印象と問題点 ① 全ての分野にわたって、熱心な取り組みが行われ、申し分の無い状況である。 ② しかしながら、20を超える委員会、その実行組織、クラス担任、クラブ顧問、寮務等々、83人の教員がそれぞれ複数の役割分担をしているが、このようなノルマの中で、果たして教育研究面に支障は無いのだろうか。 ③ 外部評価、JABEE審査に向けて、各評価部門の規定等の整備、推進、エビデンス等が整えられているが、全く問題無く進んでいるのだろうか。これは漠然とした疑問である。 ④ また高専という特色ある教育機関の、今後の発展、展望はどうなっていくのだろうか。</p> <p>4-2 総合的に大変信頼感のある教育、研究、運営が行われていると評価できます。充実した高専であることがわかります。科学研究費などの外部資金への申請状況がはつきりしませんでした。外部への発信の一助にもなりますので、科研費へ申請率を高める余地があれば、申請率の向上をお勧めします。学位の取得率も同様に向上させることもお勧めしたいと思います。</p> <p>4-3 自己点検評価報告書を見る限り、それぞれの項目において努力をされ、成果も上がっていると判断される。</p> <p>4-4 創立当初からの教育理念、「技術者である前に人間であれ」が確りした基盤となって受け継がれており、学内教職員、学生にも正しく徹底されており学校全体が常に変化にも適切に対応しつつ前進していることが評価される。その結果、養成された人材が就職率や進学率に示されている通り幅広い社会から高い評価を受けていることから評価は高いものがある。</p> <p>4-5 全般的には殆どの項目で「標準的」及び「やや優れている」です。特注すべきところは、教育理念にあると思います。中学卒業からの5年間の人づくりが基本です。 学力、専門技術能力だけでは社会に貢献できません。豊かな人間性を持った人間力を養う大事な時期でありそこから生まれる独創性、高い技術能力を積み重ねていくためにも、すばらしい理念だと感じています。</p>		

以前よりも地域との関わりが増しているようです。いろいろな連携や発表の機会が学生に良い影響を与えます。いろいろな機会を通して社会との交わりを持てるような運営を期待します。

クラブ活動の項目で唯一、2を付けています。最低必要なものは予算化するなりの環境が必要です。

4-6

教育理念、教育目標が明確にされており、卒業生の進路状況等をもみても教育・研究活動が着実に成果を上げていると感じられます。ただ、資料がなかったため他の高専と比較した小山高専の特徴を十分評価できないのが残念です。

これからの日本における「ものづくり」を考えると、新興国の追い上げのなかで、いっそう世界の人々のニーズに応えられる魅力ある製品あるいは課題解決型のシステムの提供が重要になってくると考えられます。また、国内では高齢化の進展でバリアフリーな製品やノーマライゼーションを進めるシステムなどが求められると思います。そういったなかで人間性を重視する教育理念はいっそう評価できます。今後さらに、その教育理念を具体的な教育活動のなかに生かしていく努力がなされることを望みます。

また、グローバル化が進むなかで、やや弱点となっている語学力の向上や国際感覚を高めるための教育にもう少し力を入れられることを望みます。

10. 外部評価用「評価シート(JABEE)」集計結果

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

	評価項目	平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
基準1	自立した技術者の育成を目的として、下記の(a)~(h)の各内容を具体化したプログラム独自の学習・教育目標が設定され、広く学内外に公開されていること。また、それが当該プログラムに関わる教員および学生に周知されていること。	4.5	<ul style="list-style-type: none"> ○学習・教育目標が設定され、公開され周知されている。 ○小山高専独自の目標が掲げられ、学内外に適切に公開・周知されていると評価できる。 ○6ページの表2-1及び7ページの表2-2によると、本校のプログラムの学習・教育目標とJABEE要求事項との関係は対応しているようである。 ○認定に要求される知識、能力と本プログラムの学習教育目標等に盛り込まれている。 ○複合工学系プログラムにおいて独自の学習・教育目標を設定している。教員、学生、保護者に周知されている。ホームページ上にも公開している。社会や学生の要望にも配慮されている。 ○JABEE認定を受けることで、専攻科への志望者の増加等につながっている。
基準2	(3)プログラムは学生の主体的な学習を促し、十分な自己学習時間を確保するための取り組みを行っていること。	4.5	<ul style="list-style-type: none"> ○①とくに専攻科は少人数なので自己学習についてもさらにきめ細かな指導が可能と思われる。 ○②アルバイト等が自己学習時間の確保の障害となっていないかなどを調査してみるのもよいのではないか。 ○十分な自己学習時間を確保するための取り組みが行われている。 ○十分な自己学習時間が確保されていると評価できる。老婆心ながら、学生の卒業研究や人間性を涵養するための時間の確保が難しくなっていないかなどの心配をいたしております。 ○レポート課題を課して、自己学習時間の確保に努めている。 ○本校のJABEEプログラム学習時間は、授業時間としてカウントしてもJABEE基準をクリアしている。 ○実務研修は授業時間に算入しないことも含め、高専単位制で学科低学年を過ごしてきた学生には自己学習化は容易ではないが、自学自習時間の量を認識させ、レポート課題を課し、自己学習時間の確保に努めている。授業時間も講義科目について大学の学習実時間数と比較すると1単位分の学習時間は2倍となっている。
基準3	(1)プログラムの学習・教育目標を達成できるように設計されたカリキュラムの履修に必要な資質を持った学生を入学させるための具体的な方法が定められ、学内外に開示されていること。また、それによって選抜が行われていること。	4.3	<ul style="list-style-type: none"> ○小山高専生の本科3年から4年次への進級にあたってそれ以外の年次の進級と大きくは変わらないと考えよいか。 ○プログラムの学習・教育目標の達成に必要な能力を持つ学生を入学させる具体的な方法が準備され、学内外に開示されている。 ○明確に開示されているか疑問である。 ○プログラムの学習・教育目標を達成できるようカリキュラムが設計されている。各科目とプログラムの学習・教育目標との対応関係がシラバスにより明確に示されている。学内外に開示されている。
	(2)プログラム履修生を共通教育等の後に決める場合には、その具体的方法が定められ、当該プログラムに関わる教員および学生に開示されていること。また、それによって履修生の決定が行われていること。	4.2	<ul style="list-style-type: none"> ○具体的にどのようにやられているか、教えてください。 ○具体的方法が定められているか？ ○プログラム履修生を共通教育後に決める場合の具体的方法が定められ、面談等により詳細に学生へ伝えられている。 ○本科・専攻科の募集要項に履修に必要な資質を持った学生を入学させるための具体的方法が記されている。各説明会、ホームページにおいても内容を開示している。
	(3)学生をプログラム履修生として編入させる場合には、その具体的な方法が定められ、学内外に開示されていること。また、それによって履修生の編入が行われていること。	4.3	<ul style="list-style-type: none"> ○高卒等で4年次から編入する学生も本科卒業後、専攻科や大学等への進学(編入学)がみられるか。 ○プログラム履修生として編入生を迎える場合、具体的方法が学内外へ開示され、施行されている。 ○編入学後も必要な対応をしている。 ○編入生については、未履修の教科・科目について事前学習を通知、編入予定学生からの質問等に担当教員が対応している。編入後は必要に応じて課外での補習等を実施している。開示されている。

(*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

評価項目	平均評価点(*)	評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等
<p>基準3 (4)プログラム履修生の移籍を認める場合には、その具体的方法が定められ、当該プログラムに関わる教員および学生に開示されていること。また、それに従って履修生の移籍が行われていること。</p>	4.3	<p>○入学後、学科の移籍や進路変更を希望する学生への対応は十分に なされているか。 ○プログラム履修生の移籍に関して具体的方法が準備され、教員・学 生に開示されている。 ○大学3年次への編入等についてもしっかりと対応している。 ○プログラム履修生の移籍については、他大学編入学者それぞれに対 して個別に対応している。専攻科入学がプログラム途中での入学で方 法、条件は、学校要覧、ホームページにも詳細に開示している。</p>
<p>基準4 教育環境および学習支援に関し て、授業等での学生の理解を助 け、学生の勉学意欲を増進し、学 生の要望にも配慮する仕組みが あり、それが当該プログラムに関 わる教員、職員および学生に開 示されていること。また、それ に従った活動が行われていること。</p>	4.7	<p>○専攻科は学生数がかなり少ないが、それにより、きめ細かな指導が 可能となっているか。 ○学生の勉学、生活面における支援に関しては、必要十分な支援体制 が組織され、情報が開示され、活動している。 ○学生への各種支援が適切に行われている。 ○学生への適切な支援がなされている。 ○教育環境、学習支援に対しては各センターや授業アンケートによる学 生の要望等を配慮する仕組みがある。開示されており、改善目標、改善 策も報告されている。</p>
<p>基準5 プログラムの各学習・教育目標に 対する達成度を総合的に評価す る方法と評価基準が定められ、そ れに従って評価が行われている こと。</p>	4.2	<p>○学習、教育目標の周知徹底、必要性等を更にはかってほしい。 ○GPA制導入が学生の向学心を高めるのに役立っているか検証してみ るとよいのではないか。 ○達成目標に対して、現在細部の運用規定を検討中とのこと。即ち、総 合的評価がルーティンワークとして定着するという見方においては未だ 途上にあると判断される。 ○目標に対する達成度が高く評価できる。さらに英語力のUPを期待し ます。 ○学習・教育目標ごとの達成基準が設定され、評価が行われている。 ○各授業科目においてシラバスに定められた評価基準により達成度の 評価が行われている。</p>
<p>基準6 (1)学習・教育目標の達成状況に 関する評価結果等に基づき、基 準1-5に則してプログラムの教 育活動を点検する仕組みがあり、 それが当該プログラムに関わる 教員に開示されていること。ま た、それに関する活動が行われ ていること。</p>	4.0	<p>○プログラムの教育活動を点検する仕組みは委員会として組織化され ている。また検討事項・決定事項は関係する全教職員へ開示されてい る。但し教育目標・アドミッションポリシーの認識、シラバスの活用要領 等に未だ改善の余地がある。 ○改善のための教育点検においてPDCAシステムを利用している。 ○PDCAシステムにより改善のための教育点検をしている。点検評価 委員会、外部評価委員会の評価もしている。プログラムに関わる教員に は学内LANの掲示板上で開示している。</p>
<p>教育点検の結果に基づき、基準1 -6に則してプログラムの教育活 動を継続的に改善する仕組みが あり、それに関する活動が行われ ていること。</p>	4.0	<p>○学生アンケートが行われ、教育改善推進室、教務委員会の熱心な討 議と改善への取り組みが行われている。今後はPDCAサイクルの内、A (アクション)、即ち改善策のフィードバックが適切に行われることが途上 にある。 ○学生による評価及び教員による自己評価などが、各教員へ周知さ れ、教育改善につながるシステムが作られていると評価できる。 ○個別の改善は授業実施記録や学生による授業評価を照会して実施 されている。 ○教育点検の結果に基づいた学習・教育目標・達成度の評価方法・評 価基準等の改定と改善活動を継続していくシステムがある。教育点検シ ステムを構成する各会議、委員会、教育改善推進室により改善を図り、 継続的に実施されている。 ○教育点検のシステムは整備されていると思われるので、点検結果を もとに教育活動の改善に着実に取り組んでいかれることを期待する。</p>

総合評価(5段階評価)における 平均評価点(*)	4.3
-----------------------------	-----

(自己点検書全般についてのご意見、アドバイスなど)

1. 小山工業高等専門学校は、昭和40年に開設して以来、45年の歴史を有する。この間、高専法の目的に沿って、技術者養成が行われてきた。その後、生徒の進学熱向上を受けた、専攻科の設置が行われ、準学士教育と、学士教育が平行して行われるようになった。本来、高専法に則り、学校運営が行われるが、生徒の希望、進路が多様化してきたことは、学校運営上、大変なことであると、推察される。しかしながら、こうした情勢下において、小山高専では、生徒の受け入れ、教育、就職・進学等の各ステージについて、適切な協議・検討組織をつくり、その運営は、後の改善策を含めて進められている。
このように当該プログラムはJABEEの目的に沿って、教育・検証・改善が進められており、JABEEの認定に相応しい運営が行われていると判断される。しかしながら自己点検書の自己点検結果にも見られるように、JABEEの基準を満たすための、更なる改善の努力が必要であり、今後の活動が目される。

2. JABEE対応の充実した教育体制を取られていると評価できます。安心感のある教育を期待できます。英語力をもう一段アップすることも期待しています。教員の学位取得率の向上を更に期待しております。

3. JABEEプログラムの取り組みについて－2010自己点検書の概要－
以上を読んでも理解できない点があったが、努力していることはわかりました。

4. JABEE認定の意義をよく理解し、それをふまえたプログラムが作成され実行されており、成果も良く実績は評価される。

5. 高専単位から大学単位への移行期であり、難しい部分もあると思うが全般に概ね評価できる。

6. 高専本科4、5年生と専攻科を合わせたプログラムのため、評価がむずかしいところもある。
本科の学生の卒業生のうち専攻科への進学は1割強で、他大学等への進学(編入学)の方が3～4割と多い。そうしたなか、専攻科についてはこのところ入学者が入学定員を上回っているが、今後専攻科の定員を増やすのかどうかなど、専攻科の今後の方向についてさらに検討されるとよいのではないかと。
高専本科4、5年生と専攻科を合わせたプログラムであるので、一般の工学系の大学の学部課程と比較してその特徴を分析し、今後の高専における(大学学部レベルの)工学教育のあり方について検討を深められるとよいのではないかと。

参考資料 1

小山高専の沿革（概略）

【小山高専の沿革(概略)】

- 設立:昭和40年(本年:創立45周年)
3学科:機械工学科、電気工学科、工業化学科
- 学科等の新設・設置・改組
 - ◎昭和45年:「建築学科(新設)」
 - ◎昭和56年:「工業安全教育研究センター(設置)」
(現在、「地域連携共同開発センター」)
 - ◎昭和60年:「電子制御工学科(新設)」
 - ◎平成02年:「工業化学科」→「物質工学科(改組)」
 - ◎平成11年:「専攻科(設置)」3専攻
(電子システム工学・物質工学・建築学、専攻)
 - ◎平成13年:「電気工学科」→「電気情報工学科(改組)」
 - ◎平成17年:JABEE(複合工学)認定
 - ◎平成19年:「機関別認証評価」認定
 - ◎平成22年:専攻科[3専攻→1専攻(改組)]、JABEE継続受審

【小山高専の教育目標・教育への取り組み】

《小山高専の教育の基本理念》

「技術者である前に人間であれ」初代校長の第1回始業式訓辞
〈教育方針・人材像のキーワード〉

- ①豊かな人間性、②感性と創造力、③科学・英語・専門基礎力
- ④問題解決能力、⑤情報技術力、⑥コミュニケーションと国際感覚

《教育への取り組み(教務+学生+寮務)》

- ◎学生が勉学意欲を高める教育体制→留年・退学対策
「先進技術の導入教育(フロンティア技術入門)1年共通科目」
「1-3年授業科目の修得:義務化」:再試験・再評価の義務化
「キャリア支援・メンタルヘルス」「学寮体験(オープン・ドミトリー)」
- ◎機構主催・教員研究集会(9月、本校で開催)
「学業成績不振者のための指導・支援体制の在り方」
〈理数系科目の指導(教務)〉〈学習・発達障害者への支援(学生)〉
〈インターンシップを含むキャリア教育(教務+学生)〉

【専攻科・学科の改組、特色ある教育等】

《改組等》「将来像」学科・専攻科の「7年間一貫教育」

＜専攻科の改組＞ 平成22年度から実施

◎「複合工学専攻」(3専攻→1専攻)

→複眼的視野を持つ「開発型技術者」の育成

＜学科改組(検討)＞ 社会のニーズを踏まえた学科等の編成

◎電気情報工学科と電子制御工学科:特徴の明確化

◎建築学科:中学生に魅力ある教育内容(デザイン系)

《特色ある教育・地域貢献プログラム》

◎「サテライトキャンパスの設置・運営による情報発信と地域貢献の促進」(とちぎ歴史文化まちづくりセンター)

◎最先端技術を理解するための学際カリキュラム

◎企業技術者活用プログラム

【入学者の状況・進路状況】

《入試倍率》	H20年	H21年	H22年(定員)
推薦選抜	3.0	3.1	2.4(3割→4割)
学力選抜	2.1	2.0	2.0(7割→6割)

就職(45%)	H19年	H20年	H21年
求人倍率	36倍	39倍	23倍

進学(55%)	H20:計98名(推薦42), H21:計91名(推薦44)
H20(進学先)	専攻科(29)、技科大(14)、宇大(10)、群大(9)、農工大(7)、筑波(6)、東大・阪大・東北大・北大(各1)他
H21(進学先)	専攻科(36)、技科大(19)、農工大(8)、群大(6)、宇大(4)、千葉・新潟(2)、北大・筑波・電通(各1)他

【学生へのサポート体制】

《進路支援室》

- ◎学内ウェブサイトを活用した「就職・進学情報」の提供
- ◎キャリア教育セミナー（職業啓発・労働法・企業説明会etc.）

《メンタルヘルス等への対応》

- ◎「学生支援室」の設置・「カウンセラー(2+1名)」の配置
- ◎「キャンパス安全マニュアル」の作成

《各種セミナー》

- ◎交通安全・スポーツ救命・リーダー研修・薬物乱用・サイバー犯罪etc.
- 《スクールバス》利用者数：80名、事前申込制、朝夕(登下校時間)

《学寮》

《寮生数の推移》	H20年	H21年	H22年
全在寮生数(女子)	188(41)	171(32)	169(27)
留学生数(女子)	22(6)	16(2)	13(1)

学外機関との連携による教育

《インターンシップ》

<参加状況(資料集)>◎専攻科は必修

- ◎学科4年生→H19年度:65%, H20:70%, H21:55%

《宇都宮大学「教育研究上の交流・連携に関する協定」》

- ◎単位互換・インターンシップ・研究設備の相互利用等

《「大学コンソーシアムとちぎ」に加盟》

- ◎県内、18校の大学短大との協定
- ◎単位互換・学生交流・学生活動の補助金
- ◎合同研究発表会：大学院生と互角の成果(受賞者：多数)

《資格取得》単位認定←5年生(卒業時)

単位認定状況	H19年	H20年	H21年
件数(学生数)	112(74)	135(78)	72(54)

《最先端技術を理解するための学際領域カリキュラムの構築》

—学際領域の実験・実習カリキュラム構築と教材開発—

H21年度・高専改革推進経費(採択)

◎目標のたとえ:

「森を見て、木を見て、さらに森を見る」プロジェクト

①導入教育(森を見る)

◎最先端技術の概要を知る。

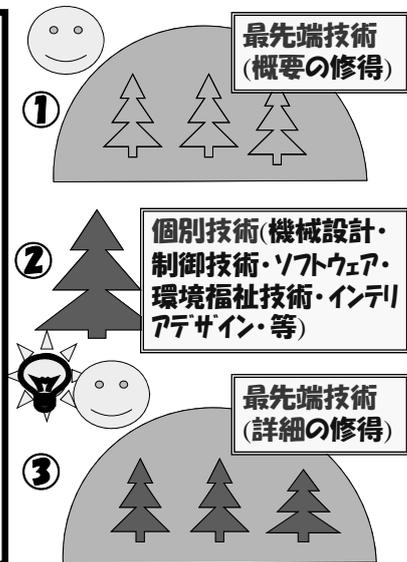
②個別の専門教育(木を見る)

◎各分野における技術の基礎知識
応用知識を修得する。

③総合技術教育(さらに森を見る)

◎専門分野の異なるグループでの共
同学習・研究(深い知識の修得)

↑ 地元企業・大学との連携により、
サポート体制を強化



《「電気自動車」で各分野の最新技術を学ぶ》

M:制御機構、E:モーター技術、D:電子制御、C:電池、A:環境



<左図> 走行状態を作り出すファンの様子 <右図> シャシーダイナモ(駆動輪に走行状態と同じ負荷を与える装置)に後輪が乗っている様子

1年:フロンティア技術入門(森を見る)、2・3年:創造実験(森→木をみる) 4年:デザイン教育、5年:卒業研究(木を見る)
専攻科:特別研究、プロジェクト・デザイン(再び森を見る)

企業との連携による教育(COOP教育)

《企業技術者を活用した教育》

H19年度から実施

◎目的: 将来の技術に対する、学生のモチベーションを高め
地域におけるイノベーション創出のチャンス提供
→創造性・問題解決能力・実践的能力の育成

◎H19年度: 機械工学科(4・5年)・電子制御工学科(4年)で実施
テーマ「最先端技術体験学習」センサー・ロボット等

◎H20年度: 機械・電気・電子科(3-5年、専攻科)で実施

◎H21年度: 全学科・専攻科で実施

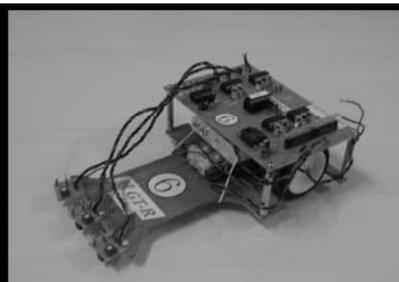
テーマ「企業技術者との連携による創造性育成道場」

地元企業技術者: ものづくり・知財・安全・技術者倫理、個別指導

◎H22年度: 引き続き、全学科・専攻科で実施予定

★退職技術者の招聘、「技術者による評価」を予定

プロジェクトワーク(3年電気情報工学科)《創造的もの づくり教育》ロボットの設計・製作・プログラミング・競技



創造力・好奇心・探求心・持続性

建築設計(3・4年建築学科)《創造的デザイン設計》
デザイン設計・プレゼンテーション・専門家による評価



建築設計、デザイン設計、卒業設計の授業

創造性を育む課外活動

専門家による評価

《インターンシップ(企業・大学)》
●本科4年・専攻科1年



◎実施場所:

筑波大学・
物質材料
研究機構
ナノテクノロジー
研究室

◎研修テーマ:

有機高分子
トランジスタ
の試作・評価

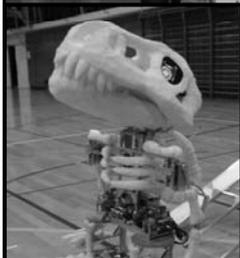
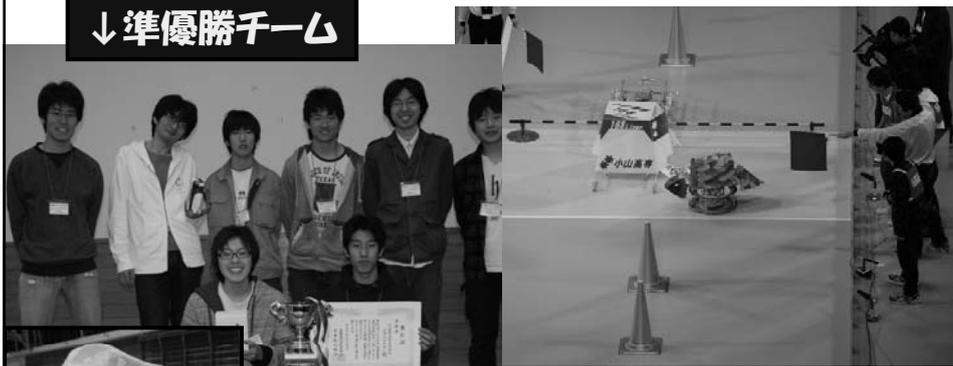
**《小山高専・学生の活躍》
各種コンテストへの学生参加と受賞状況**

- 《高専ロボットコンテスト(ロボコン)》
 ◎H21年度: 地区大会(デザイン賞・特別賞)2チームが全国出場
 ◎H20年度: 全国大会準優勝
 ◎10年連続全国大会出場(13回)、地区大会優勝・受賞: 多数
 《高専プログラミングコンテスト(プロコン)》
 ◎H20: 準優勝・敢闘賞、H18: 審査員特別賞・ITシニア賞etc.
 《高専デザインコンペティション(デザコン)》
 ◎H21: 空間コンペ(優秀賞)、◎H20: 同(デザイン特別賞)
 ◎H19: 空間コンペ(特別賞)
 《企業&学生研究発表会(大学コンソーシアムとちぎ主催)》

《 結 果 》	H18年	H19年	H20年	H21年
参加者数	4	6	5	10
受賞者数	4	2	5	10

**《アイデア対決全国高専ロボットコンテスト》
平成20年11月、テーマ:「生命大進化」**

↓準優勝チーム



←特別出演
Superザウルス君

↑小山高専
vs.
松江高専



高専ロボコン2009 全国大会(ダンシングカップル)

選手宣誓

Exhibition



《全国高専プログラミングコンテスト》

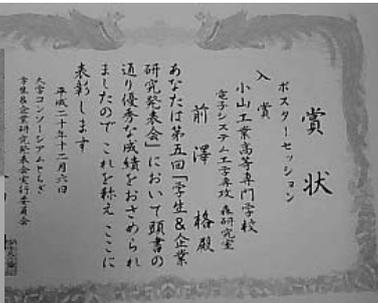
平成20年10月、テーマ「ゆっくいトッタトラック」

↓準優勝チーム



↑競技種目

《学生&企業研究発表会(大学コンソーシアムとちぎ)》
平成20年12月、とちぎ産業創造フラザ



ポスター部門
銀賞受賞

《学生&企業研究発表会(大学コンソーシアムとちぎ)》
平成21年12月、とちぎ産業創造フラザ



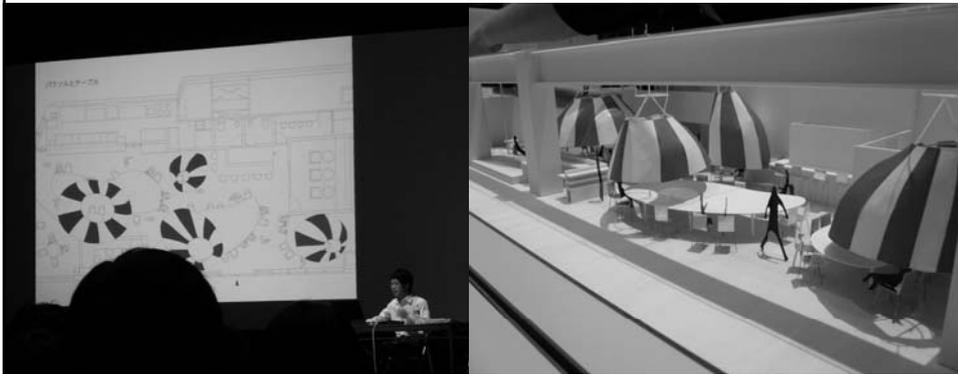
知事賞・受賞



建築設計競技(コンペ) 2007年度

「最優秀賞」受賞!

建築学専攻1年・大塚裕紀 君



日本たばこ産業株式会社開催「SMOKERS' STYLE COMPETITION 2006」による「分煙」のあり方を求めた建築設計コンペ(実際のカフェにて実現する実施設計へ)。応募作品801点中の1位:最優秀賞受賞
竣工後のカフェと傘を映した、分煙CM紹介もされた。

デザコン2008in高松 2008年度

「デザイン特別賞」受賞!

4年建築学科・渡辺惣平 君



《高専デザコン:空間コンペ「中心街再生のための交流拠点の提案」》
小山市の中心である駅前大通り「祇園通り商店街」を舞台とした、
ファサードデザインの提案において、デザイン特別賞を受賞

卒業設計の表彰 2008年度

JIA栃木地域会「最優秀賞」受賞！

5年建築学科・伊東由里子 さん



《卒業設計：「表参道 - 裏参道-伝統工芸でつなぐみち-」》
県内建築設計事務所の実務者による審査。
宇都宮大学、足利工業大学、小山高専の学校推薦作品および
公募で集めた計8作品から、最優秀賞を決定

テザコン2009in豊田 2009年度

「優秀賞」受賞！

5年建築学科・渡辺惣平 君



《高専テザコン：空間コンペ「景観と人にやさしい住まい」へ応募》
作品名「床のち庭 ときどき田んぼ。」今後の各地域のラーバンエリアの景観を形成
するにふさわしい住宅あるいは住環境の「型」を提案、
応募数253件中2位の「優秀賞」受賞（彼は2年連続の本選出場および受賞）。

建築設計競技(コンペ) 2009年度

「最優秀賞」受賞!

5年建築学科・渡辺惣平 君



株式会社ハーフェレ ジャパン主催「スモールスペースにおける機能的な空間デザイン」へ応募。40㎡程度のスモールスペースに「機能性-functionality-」を盛り込んだ空間デザインの提案、応募者数201件中1位「最優秀賞」を受賞、ドイツ大使館にて表彰。

卒業設計の表彰 2009年度

第6回JIA全国学生卒業設計コンクール
2009に県代表として出展、
「西沢賞(審査員賞)」を受賞

建築学専攻1年・伊東由里子 さん



2008年度JIA栃木地域会「最優秀賞」受賞の卒業設計
《「表参道 - 裏参道 - 伝統工芸でつなぐみち-」》
第6回JIA全国学生卒業設計コンクール2009に県代表として出展
全国有名大学も参加の全51作品中、「西沢賞(審査員賞)」を受賞

参考資料 2

小山高専の J A B E E プログラム

小山高専のJABEEプログラム

プログラム名： 複合工学系プログラム
General Engineering

受審分野： 工学（融合複合・新領域）関連分野

受審経緯： 2005年度（平成17年度）本審査〈34項目〉

審査結果； A（適合） 18項目

C（懸念） 12項目

W（弱点） 4項目

2007年度（平成19年度）中間審査〈本審査で
判定C, Wの項目〉

審査結果； C（懸念） 5項目

W（弱点） なし

2010年度（平成22年度）認定継続審査

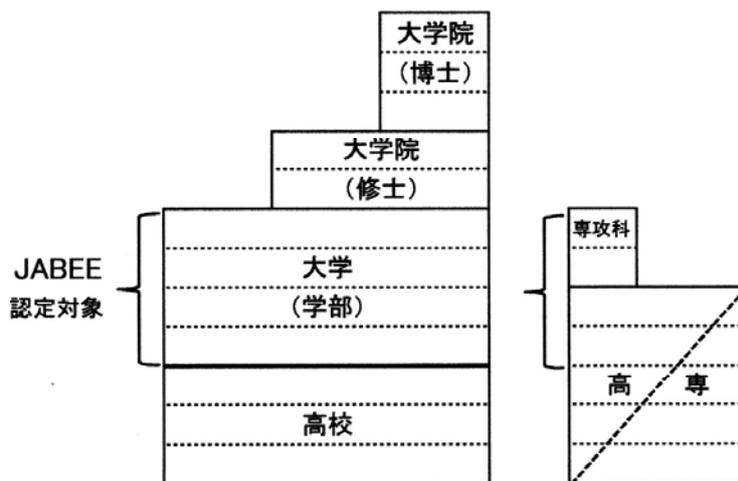
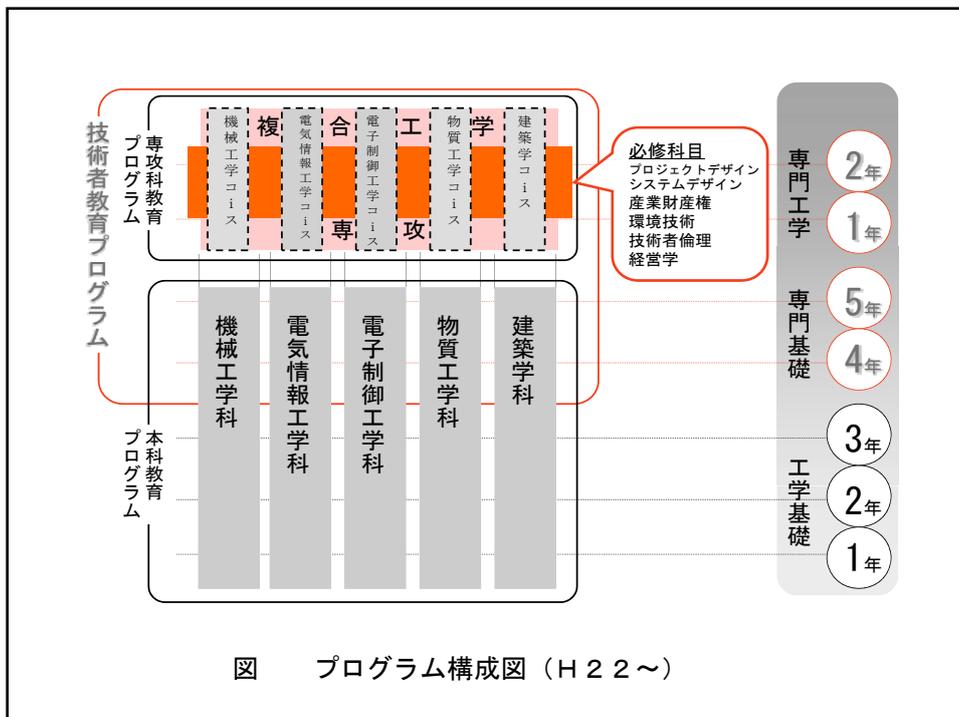
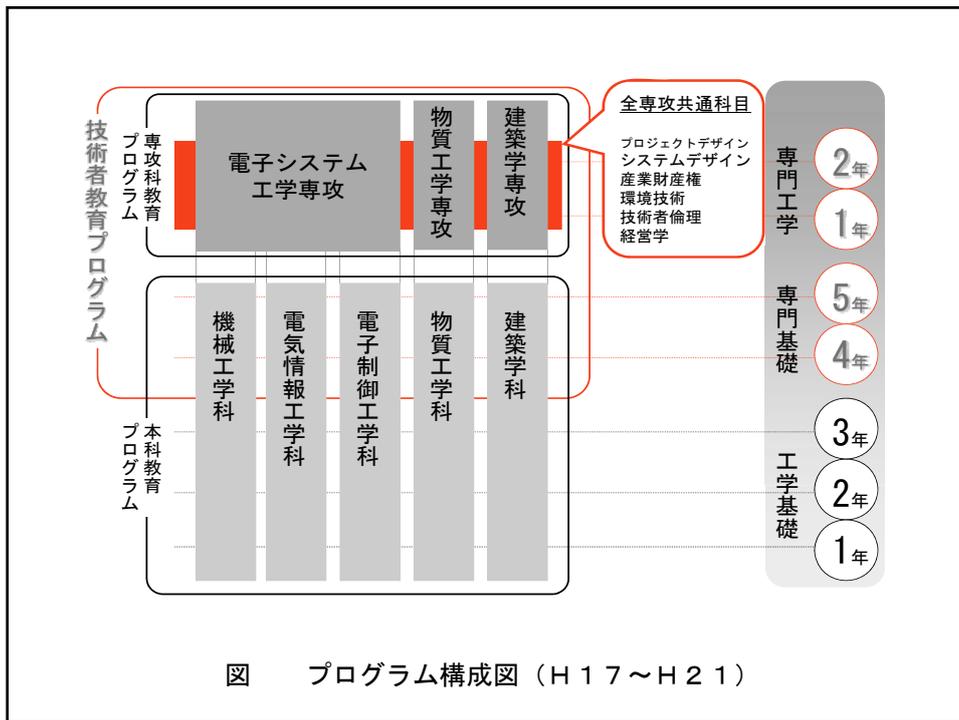


図 教育課程とJABEEプログラム認定対象の関係



JABEEプログラムへの要求事項

- (1)教育プログラムは、社会のニーズに一致する使命と目的を明示しなければならない。
- (2)教育プログラムは、使命と目的に沿う具体的な教育目標を定義し、教育活動の成果がこれらの教育目標とJABEEが求める教育成果を満たしていることを示さなければならない。
- (3)教育プログラムを継続的に改善する仕組みを持たなければならない。
 - a) 学生や就職先企業など顧客層のニーズを採り入れる方法
 - b) 教育活動を観察して教育成果を測定し分析する方法
 - c) 教育プログラムが教育目標を達成しているか否かを判断する方法
 - d) 効果的な自己点検、教育改善システム（組織と活動）
- (4)入学学生の質、教員、設備、大学のサポート、財務などの諸問題を教育プログラムの目標と結びつけて十分検討してあること。

JABEE審査項目

- 基準1：学習・教育目標
 - 基準2：学習・教育の量（1600時間以上の総授業時間）
 - 基準3：教育手段（目的・目標を達成するために必要な資質をもった学生を入学させる方法、編入生の既習得単位に対する互換性評価法）
 - 基準4：教育環境（施設・設備、財源、勉学への支援体制）
 - 基準5：学習・教育目標達成度の評価と証明（目標達成度の評価基準とそれに基づく評価、総合的な達成度評価、厳密な成績管理）
 - 基準6：教育改善（自己点検システム、教育手法や教育環境の改善活動）
- 分野別要件（当該分野では履修生が基礎工学、専門工学の知識と能力を有すること、および教員団に実務を教える能力を有する教員を含むこと）

表 機関別認証評価とJABEE審査の違い

教育機関の活動	機関別認証評価	JABEE審査
求める活動	点検(Inspection)	改善(Quiality Improvement)
評価の視点	何をするのか?	いま行っていることは目的とする学習成果の達成に結びつくのか?
教育活動の立場	教育活動そのものが評価対象	教育活動は教育成果を達成するための手段
評価対象	入力(カリキュラム、教員、設備)	教育成果(Outcomes)
Outcomes の役割	定義なし	教育成果は教育活動を改善するための情報源
点検・評価活動の目的	外部の審査基準を満たすための活動	評価を教育プログラムへフィードバックし、質的改善を図るための活動

各基準関連の取り組み概要

基準 1 : 学習・教育目標

- JABEE要求事項と本校の学習・教育目標開設科目との関係
- 複合工学系科目の開設状況

基準 2 : 学習・教育の量 (1600時間以上の総授業時間)

- 学修単位化取り組み推移状況
- 学習保証時間(授業時間)確保の推移状況
- 自己学習化

基準 3 : 教育手段—入学者選抜方法、教育方法、教育組織—

- (4年次編入生、他高専から専攻科入学)学生の受け入れ方法と支援要領、
- 移籍学生(大学3年次編入生)について

基準 4 : 教育環境(施設・設備、財源、勉学への支援体制)

- 学生への各種支援について

基準5：学習・教育目標達成度の評価と証明（目標達成度の評価基準とそれに基づく評価、総合的な達成度評価、厳密な成績理）

○学習・教育目標の達成状況

○JABEE修了生の推移

基準6：教育改善（自己点検システム、教育手法や教育環境の改善活動）

○教育点検； PDCAサイクル

○教育改善推進室主導型アクション

○外部評価の活用

教員

○博士号取得者数の推移

○教育研修会等への参加状況

○高専特有の担任制

基準1 関連

JABEE認定に要求される知識・能力と本プログラムの学習・教育目標との関係

； 詳細は概要書の表

； JABEE認定に要求される知識・能力(a)～(h)と本プログラムの学習・教育目標(A)～(E)、具体的な目標(A-1)～(E-3)の15項目との関係を示している。

若干手薄な分野が浮き彫りになるが、本プログラムの学習・教育目標にはJABEE認定要素がすべて盛り込まれている。

JABEE認定に要求される知識・能力

- (a) 地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養
- (b) 技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、および技術者が社会に対して負っている責任に関する理解（技術者倫理）
- (c) 数学、自然科学および情報技術に関する知識とそれらを活用できる能力
- (d) 該当する分野の専門技術に関する知識とそれらを問題解決に応用できる能力（※）
- (e) 種々の科学、技術および情報を利用して社会の要求を解決するためのデザイン能力
- (f) 日本語による論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力
- (g) 自主的、継続的に学習できる能力
- (h) 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力

(d)について、該当する分野は工学（融合・複合、新領域）分野で、この分野では次の知識・能力が要求される。

- (1) 基礎工学の知識・能力
基礎工学の内容は、①設計・システム系科目群、②情報・論理系科目群、③材料・バイオ系科目群、④力学系科目群、⑤社会技術系科目群の5群からなり、各群から少なくとも1科目、合計最低6科目についての知識と能力
- (2) 専門工学の知識・能力
 - a) 専門工学（工学（融合複合・新領域）における専門工学の内容は申請高等教育機関が規定するものとする）の知識と能力
 - b) いくつかの工学の基礎的な知識・技術を駆使して実験を計画・遂行し、データを正確に解析し、工学的に考察し、かつ説明・説得する能力
 - c) 工学の基礎的な知識・技術を統合し、創造性を発揮して課題を探求し、組み立て、解決する能力
 - d) （工学）技術者が経験する実務上の問題点と課題を理解し、適切に対応する基礎的な能力

小山高専JABEEプログラムの学習・教育目標

- (A) 技術者に必要な基礎知識と応用力を身につける。
 - (A-1) 科学や工学の基本的原理や法則の基礎知識を身につけること。
 - (A-2) 基礎知識を専門工学分野の問題に応用して解くことができること。
 - (A-3) 専門分野の課題や問題点を考えるとともに、問題解決の目的と方法を明らかにして自主的に研究を進めることができること。
- (B) 技術者としての素養を身につける。
 - (B-1) 実験や観察、調査、製作を自ら行い、データ採取や解析、考察を通して結論を導くことができること。
 - (B-2) 数学の知識と、数学と工学をつなぐ基礎的知識を身につけること。
 - (B-3) 技術的課題に広く関心をもち、課題や問題を解決するための全体のプロセスを考察して具現化（デザイン）することができること。
- (C) 技術と自然や社会とのかかわりを理解する。
 - (C-1) 工業技術が自然や社会環境に与える影響を認識でき、資源やエネルギー、環境を考慮した技術を指向できるようになること。
 - (C-2) 社会・経済と技術の共生の可能性を把握、理解することができること。
 - (C-3) 工業技術者としての社会的責任や倫理観を自覚できること。

- (D) コミュニケーション能力を身につける。
 - (D-1) 言語の知識を習得すると同時に、語学力や会話力を身につけること。
 - (D-2) 研究調査や実験の計画を立て、実施し、結果をまとめ、それを口頭で発表して質疑応答ができること。
 - (D-3) 実社会の中で体験したことについて、自分の考えをまとめて発表、報告することができること。
- (E) 国際的な感覚を身につける。
 - (E-1) 外国の文化や価値観について知り、国際性を身につけること。
 - (E-2) IT社会やネットワーク社会の国際的な構造や問題点を理解することができること。
 - (E-3) 国際的な情報化社会の中で有用な情報を入手して、問題解決のための分析や考察に活用することができること。

学修単位科目の推移

(本科4、5年、専攻科1、2年合計)

		平成17年度(導入前) 学修単位の総単位数	平成21年度 学修単位の総単位数
電子システム工学	機械工学系	71 (本科:0、専攻科:71)	75 (本科:11、専攻科:54)
	電気情報工学系	68 (本科:0、専攻科:68)	124 (本科:52、専攻科:72)
	電子制御工学系	62 (本科:0、専攻科:62)	100 (本科:28、専攻科:72)
物質工学		87 (本科:0、専攻科:87)	134 (本科:51、専攻科:83)
建築学		72 (本科:0、専攻科:72)	114 (本科:32、専攻科:82)

学習保証時間から授業時間へ

JABEE旧基準：プログラム修了時まで1800時間以上の学習保証時間



JABEE新基準：プログラム修了時まで1600時間以上の授業時間

- ・ **学習保証時間**； 教員との対面時間以外も含まれる、授業・学習時間（実務研修等も含む）
- ・ **授業時間**； 純粋に教員との対面学習時間（実務研修等は含まれない）

(2) 学習保証時間、授業時間の推移

	平成16年度(学習保証時間) JABEE基準:1800時間以上	平成21年度(授業時間) JABEE基準:1600時間以上
機械系	2935	3015
電気情報系	3090	3300
電子制御系	2965	3000
物質系	3802.5	3362.5
建築系	2940	3075

授業時間として計算しても
十分JABEE基準を満たしている

(3) 自己学習化への努力

学習単位の自己学習時間確保への取り組み

講義A：1講義（1h40m）当たり、3h20m必要
講義B・演習：1講義（1h40m）当たり、50m必要

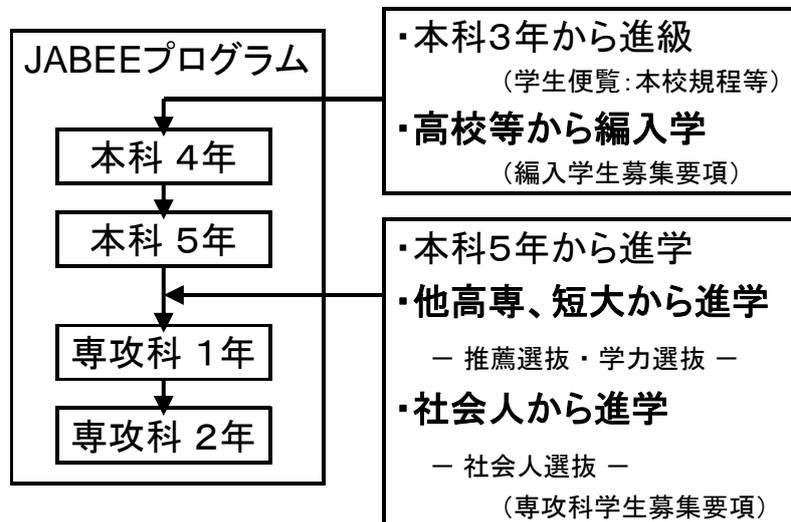
各科目ともレポート課題を課して、
自己学習時間確保に務めている。

・自己学習時間に関する学生アンケート結果の例

平成21年度開講				自己学習時間の内訳の平均				
学年	科目名	単位種別	講義1回に対する平均自己学習時間の平均	調べる、復習	計算、解く	見直し	清書	その他
5	科目A	講義A	2:48	0:53	1:57	0:37	0:39	0:00
5	科目B	講義A	2:56	1:28	0:55	0:30	0:42	0:20
5	科目C	講義B演習	1:20	0:20	0:56	0:00	0:20	0:00

科目によっては、ほぼ自己学習時間が満たされている。

基準3 関連 学生の受け入れ方法と支援



高校等から4年次編入学の方法

高校の英語、数学・普通高校の理科（物理、化学、生物）
工業高校・農業高校の専門に相当する試験を実施。その
結果と面接、調査書等を総合的に判定して合格者決定

4年次編入学生の支援

本校3学年までの学習で、高校では未履修の教科・
科目の事前学習資料等を送付し、事前学習を指導。
(10月)

編入学(4月)後は学生からの質問に対応し、必要
に応じて補習等実施。

他高専から専攻科への入学方法

高等学校の英語、数学、理科（物理、化学、生物）、工業高校と農業高校の専門の学習内容に相当する試験を実施し、その結果と面接、調査書、健康診断を総合的に判定して合格者を決定

他高専からの専攻科入学生への支援

入学後、プログラム科目との照合や検査結果から判断し、学力不足科目は本科4・5年科目の受講を認める。

移籍学生（大学3年次編入生）

本科5年生の8～9割がプログラム前期課程を終えた時点で、他大学3年生への編入、または企業へ就職する。
特段の手続きはなく、本科卒業要件を満たしていればよい。

特に他大学3年への編入に関しては、編入先大学の規程に従い、本校本科4、5年生時に取得した単位を編入先の大学単位へ読み替える。

この際、シラバスや単位取得証明等を参考に手続きが行われ、教務係において学生個々に対して個別対応している。

基準 4 関連

学生への各種支援について

プログラム履修支援： JABEEプログラムの達成度確認表（※）による学年終了時の履修確認、次年度の履修計画立案補助

※JABEEプログラムの達成度確認表

詳細は概要書に添付されているが、JABEEで設定している分野（人文科学・社会科学等，数学・自然科学・情報理論，基礎工学，専門工学(a)，専門工学(b)）ごとの最低限の授業時間と、本プログラムで設定している学習・教育目標ごとの達成基準をクリアできるかが判断できるデータシート

クラス担任中心による就職指導および編入学指導

就職および進学活動に関して(基本的に個々で探し、推薦書等のみ担当教員が行います。)

進学

- ①進学したい大学・学部・学科の候補を考え、インターネットなどで情報検索する。
- ②ホームページ上の入試要項などから、直接から編入学が可能か調べる。(1月頃までに行うこと)
(分からない場合は、個人で大学事務局に問い合わせ等行ってください)
- ③校内のパソコンから、<http://172.16.8.165/> で下記のように進学情報も検索できます。
過去問なども学生服で保管している場合があるので、問い合わせしてみてください。
- ④過去問題を入手し勉強を始める。(入手方法は、大学のHPなどに記載されています)(遅くとも、1月頃には勉強開始する)
- ⑤4~6月頃、受験願書を取り寄せて受験手続を進める。
- ⑥推薦書等が必要な場合は、担任に相談する。

一般受験の場合は、いつでも受験可能です。
推薦受験の場合は、1大学のみ受験であり、合格したら必ず入学しないといけません。

長岡・豊橋技大および専攻科の推薦希望締切は、4月20日頃です。

就職

- ①就職したい会社の候補を考え、インターネットなどで情報検索する。
- ②校内のパソコンから、<http://172.16.8.165/> で下記のように就職情報も検索できます。
- ③学校に求人が来ている場合は、求人票を確認し、受験意志があれば担任に相談する。
- ④必要書類等に記入し、入社試験手続を進める。

インターネットなどによる自由応募の場合は、いつでも受験可能です。
学校の求人票からの受験の場合は、1会社のみ受験であり、内定したら必ず入社しないといけません。

就職活動は、1~2月頃から始まる予定です。



担任による就職活動支援の例

就職活動や面接について

・面接前に行うこと

- 1) 自分の性格や適性、やりたいことなどをきちんと整理すること。
(自分が将来どうなりたいか、どんな仕事がしたいかなど)
- 2) 面接の質問例と解答例を作り、頭の中で整理しておくこと。
- 3) 適性検査や筆記試験のある会社もあるので、前例を調べて勉強すること。

・就職活動(面接)のポイント

- 1) エントリー、資料請求や電話での応対から選考は始まっている。
- 2) 面接時の服装は、きちんとする(髪型等はきちんとし、アクセサリー類も避ける)
- 3) 面接時に、自分の意思(やりたいことなど)はある程度主張する。
(職種・配属先などは面接前(書類審査の段階)に決まっていることもあるので、自分の意思を主張しすぎてマッチングできないと不合格になってしまう。)
- 4) 面接前に考えた解答どおりに答えられなくても絶対にあわてない。
(人事関係者も、受験者のほとんどがあがっているためほとんど気にしていない)
- 5) 面接時に最も重要になるのは、話の内容ではなく、第一印象、話し方、礼儀作法等である。

・その他

面接後、不合格になった場合は、自信をなくして落ち込まず、「自分の人間性を理解できない会社」、
或いは「仮に就職しても自分を活かしきれない会社」と考え、落ちて良かったとプラスに考え、
次の行動に移ること。

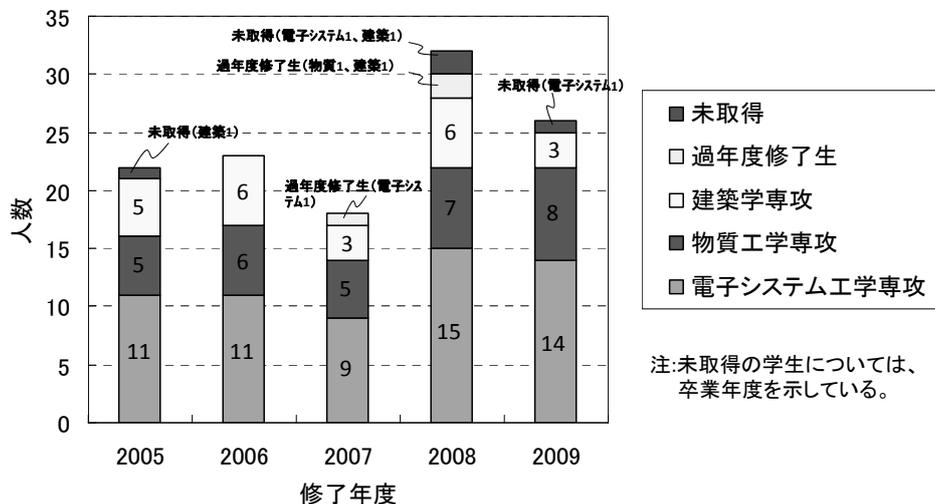
資格取得のための支援例

回	内容	実施日	時間	担当者	場所	対象学年
1	資格取得学習支援 TOEICコース ポイント解説	1/8 (火)	17:00から 19:00まで	今成		4年 専攻科1年
2	資格取得学習支援 TOEICコース 模擬試験	1/1 1 (金)	17:00から 19:00まで	今成		〃
3	資格取得学習支援 基本情報処理技術者試験コース 演習問題(1)(2)	1/2 2 (火)	17:00から 19:00まで	今成		〃
4	資格取得学習支援 基本情報処理技術者試験コース 演習問題(3)	1/2 5 (金)	17:00から 19:00まで	今成		〃
5	資格取得学習支援 基本情報処理技術者試験コース 基礎プログラミング	1/2 8 (月)	17:00から 19:00まで	今成		〃

(出典：平成21年小山高専自己点検評価報告書)

基準 5 関連

JABEE修了生の推移



未取得の学生は、全て就職

小山高専の学習・教育目標ごとの達成基準

学習・教育目標	達成を裏付ける具体的目標
(A) 技術者に必要な基礎知識と応用力を身につける。	目標Aを掲げている開設科目の60%以上の科目を履修かつ合格し、その成績のGP(Grade Point, S評価=4、A評価=3、B評価=2、C評価=1; C評価以上が合格)の平均が2以上であること。
(B) 技術者としての素養を身につける。	卒業研究、特別研究、実務研修の採点表評価の各小項目がそれぞれ60点以上であり、かつ全体として合格していること。
(C) 技術と自然や社会とのかかわりを理解する。	目標Cを掲げている開設科目の60%以上の科目を履修かつ合格し、その成績のGPの平均が2以上であること。
(D) コミュニケーション能力を身につける。	特別研究等の成果について少なくとも1回以上、学会等の外部発表を行うこと。
(E) 国際的な感覚を身につける。	TOEIC400以上もしくは、つぎのいずれかのテストでTOEIC400と同等以上のスコアを得ること。 1) 本科5年 英語演習Ⅱでの期末試験TOEIC IPテスト。 2) 専攻科 応用英語Ⅰでの「アルクネットワークシステム2」の模擬試験。

学習・教育目標の達成状況：H22.3月修了生への参考導入結果

学科	学生	A				B			C				D	E
		開設	取得	履修率	GP平均	卒研	特研	実務研修	開設	取得	履修率	GP平均		
M	1	36	23	63.9	3.0	83	83	85	8	7	87.5	2.8	○	310
	2	36	23	63.9	3.0	81	81	70	8	7	87.5	2.8	○	295
	3	36	24	66.7	1.8	72	85	85	8	8	100.0	2.0	○	395
	4	36	24	66.7	2.5	77	72	80	8	6	75.0	2.5	○	430
	5	36	22	61.1	2.7	78	77	90	8	8	100.0	2.8	○	330
	6	36	23	63.9	2.6	85	78	85	8	6	75.0	2.6	○	425
E	1	46	36	78.3	2.2	74	64	84	8	8	100.0	2.0	○	485
	2	45	38	84.4	2.4	80	75	88	8	8	100.0	1.7	○	635
	3	46	41	89.1	3.1	65	80	84	7	5	71.4	2.7	○	335
	4	46	39	84.8	2.5	83	66	89	7	7	100.0	2.3	○	455
	5	46	39	84.8	3.3	82	77	91	8	8	100.0	3.3	○	380
D	1	43	40	93.0	2.5	94	94	85	5	5	100.0	2.6	○	320
	2	43	39	90.7	3.1	93	94	86	5	5	100.0	2.4	○	360
	3	43	36	83.7	2.7	85	85	88	5	5	100.0	2.6	○	385
	4	43	40	93.0	2.9	80	80	87	5	5	100.0	2.6	○	285
C	1	47	37	78.7	3.2	84	95	94	5	5	100.0	2.0	○	315
	2	47	36	76.6	2.6	79	91	94	5	5	100.0	2.0	×	450
	3	47	37	78.7	2.5	74	76	93	5	5	100.0	3.0	×	390
	4	47	37	78.7	3.1	85	80	94	5	5	100.0	2.4	○	397
	5	47	37	78.7	2.9	86	92	94	5	5	100.0	3.2	○	410
	6	46	34	73.9	3.7	77	97	94	5	4	80.0	2.5	○	495
	7	47	36	76.6	3.6	94	95	93	5	4	80.0	2.5	○	550
	8	47	36	76.6	3.6	82	93	93	5	5	100.0	3.2	○	420
A	1	25	17	68.0	2.5	80	78	84	18	13	72.2	2.5	○	450
	2	25	17	68.0	2.3	79	83	84	18	14	77.8	2.4	○	未受験
	3	25	18	72.0	2.0	78	82	75	18	13	72.2	2.3	○	未受験

※灰色部：未達成

達成状況を踏まえた今後の課題

・目標A, Cについて

一部の学生が目標を達成出来ていない。

A：主に成績不良が要因。

C：主要開設科目（自己点検書・表4の◎科目）数が少ないことが要因の一つ。

本調査では表4◎科目のみを対象。

本校では基礎学力を重視。科目の区分は担当教員に一任。

→教員がAに重点を置くことが多く、Cは副主要科目（表4○）が多い。

課題：H23修了生については、科目における◎、○の扱いを再検討

・目標B, Dについて

全員が合格している。

特に問題はないので、今後も現状を維持する。

・目標Eについて

TOEICで達成基準に至らなかった学生が数名存在

- 要因：
- ・ 学生自身の金銭的負担が大きいこと
 - ・ H22. 3は参考導入→学生意識が低いこと
 - ・ 意識低下の結果：TOEICスコアシートの紛失
 - ・ 金銭的負担のない学内実施が可能なTOEIC IP等の認可試験の周知不足

対策：以下，2項目を学生への周知徹底

- ①目標E達成のための金銭的負担の軽減および試験日程に依存しない達成手段として学内試験の受験義務化
- ②対外的な資格として認知されるTOEIC本試験を受験した際のスコアシートの保管

学習・教育目標の達成基準を明確化
専攻科の学力水準を保つために一定の効果があることが伺える

基準6 関連

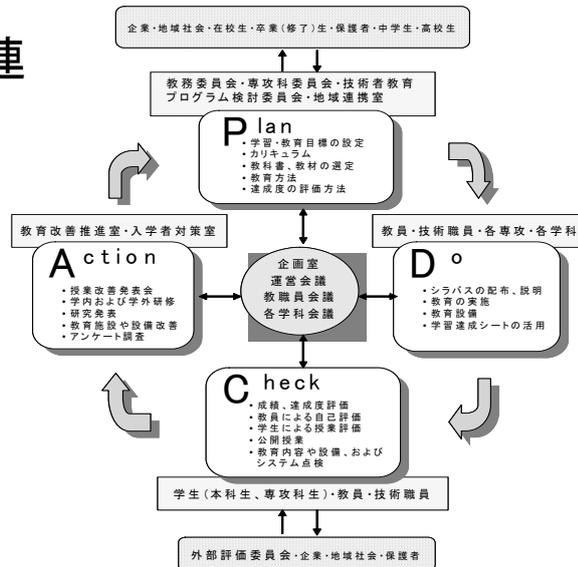


図 プログラムのPDCAサイクルの仕組み

表 教育改善推進室の活動状況

年月日	曜日	事項	備考
H17.4.1	金	教育改善室長 胸組虎胤、室員:土田、白石、井上が任命された。	
H17.4.25	月	<全教員にメール>FDに関する小冊子(『FDステップアップ2005』)についての意見を求めた。	
H17.5.9	水	教務委員会において、FDステップアップ2005が示されて、FDの年間計画が承認された。	
H17.7.6	水	全教員に7.13開催の教育改善研修会の案内がメールで配信された。	
H17.7.13	水	H17年度第1回教育改善研修会開催、講師:機械工学科井田晋、テーマ:長きを以てて 尊しとせず	参加者 29名
H17.11.11	金	<全教員にメール>平成17年度公開授業(11月18日~12月1日)の実施要綱 を送信。	
H17.11.18	金	平成17年度公開授業を実施した。平成16年度授業評価アンケートの上位60位ま での高得点授業をもとに各学科が選んだ授業を対象とした。	
H18.1.30	月	専攻科長に授業アンケート用専攻科科目一覧を送り、誤りのないことの確認を要請し た。	
H18.2.3	金	<室員にメール>平成17年度後期、通年分の学生による授業アンケート実施(2月 6日~2月10日)についての通知を行なった。	
H18.2.6	月	平成17年度後期、通年分の学生による授業アンケート実施	2月10 日まで

H18.4.3	月	平成18年度 教育改善推進室長 胸組虎胤、室員:白石、田中(昭)、渡邊	
H18.9.11	月	平成18年度前期授業評価アンケート実施	
H18.11.29	水	平成18年度教育改善研修会を開催。テーマ:学修単位についての各学科の実施状況。 機械工学科(高島)、電気情報工学科(小林(幸)、北野)、電子制御工学科(笠 原)、物質工学科(瀧美、田中(孝))、建築学科(瀧澤)	参加者 32名
H18.12.26	火	<教務委員にメール連絡>平成18年度後期、通年科目授業評価アンケートの実施計 画、対象授業科目の確認を各科教務委員に要請。	
H19.1.26	金	平成18年度授業評価アンケートの実施について、要綱、担当表を掲示、連絡。ホー ムルームにも実施案内を掲示。	
H19.1.28	月	平成17年度分授業評価アンケート報告書の冊子20冊が到着。 各科教務委員に配布。	
H19.1.29	月	平成18年度授業評価アンケートを実施	2月8 日まで

外部評価の活用

教育改善の評価要領としては、学内でのPDCAサイクルにおける点検（Check）のほかに、学外の有識者による外部評価委員会を設けており、適宜、同委員会から評価していただいている。

本プログラムに関しては、これまで2005年と2007年に評価していただいた。

教員： 博士号取得者数の推移

	今回審査 (H22年度)	前回審査時 (H17年度)
全教員	58名／79名 73.4 %	51名／83名 61.4 %
専門学科 教員	48名／57名 84.2 %	42名／59名 71.1 %

教員： 主な教育活動件数

(FDアクションレポートの集計)

年度	H21	H20	H19
教育関係研修会への参加、発表、企画	67	77	39
教育関係学会への参加、発表、企画	40	40	27
教育関係の論文発表	25	26	17
教育関係書籍の執筆、教具・教材作成	28	17	26
教育関係の受賞、教育関係研究費受領	16	13	8
指導した学生の受賞	19	20	18
その他、教員としての資質向上につながる活動	102	88	60

教員： 学級担任制の役割

(教務関係資料の担任業務より抜粋)

高専ならではの担任制によるきめ細かな個別対応

- 学業成績に関する授業担当教員との連絡、
学業に関する学生への助言
- 学生の出席状況等、学校生活全般に関する助言
- 校則等に定められた諸届・願等提出に関する助言
- 学生の個性観察とその記録
- 必要に応じた、家庭との連絡・連携
- 就職・進学その他の学生の進路指導、連絡調整

む す び

本校における自己点検評価は平成4年度から開始し、今年度で6回目を数えることとなった。

このうち2回目までは学内的に自己点検評価結果についての吟味や改善に対する意識がやや希薄で、その結果が有効に活かされたとは言い難い状況にあった。この反省から平成11年度の3回目から、より積極的に小山高専の改革改善を図っていくため、常設の点検評価委員会を設けると共に小山高専外部評価委員会を創設し、外部有識者等による評価を受けることとした。そして、平成12年度に初めて新体制による外部評価を実施して以降、今回が4回目である。

この間、本校はJABEEや機関別認証評価を受審したが、それらの審査に対応するため、様々な点において改革改善を“余儀なくされた”というのが実態であり、まさに“評価疲れ”といった感があった。しかしながら、本年度、自己点検評価と平行してJABEEプログラム認定継続審査を受審したが、勿論審査への対応は大変であるが、以前とは異なり、多少の余裕も感じながら、よりよい学校づくりに向け、多くの教職員が改革改善により前向きな姿勢で対応するようになってきたと感じている。

今回は自己点検評価報告書とJABEEプログラム自己点検書の2件について外部評価を受けた。

自己点検評価報告書については、大学評価・学位授与機構が実施する機関別認証評価と同じ項目立てとしたため、前回までの評価項目に比べて格段に増加した。そのため、外部評価委員の皆様には多大なるご尽力をお掛けすることとなった。また、JABEEプログラム自己点検書については、前回、平成19年度JABEEプログラム中間審査時におけるC評価（弱点）の項目の改善状況と、JABEE新基準への対応状況を中心に評価をいただくこととした。

さて、外部評価結果であるが、各項目5点満点である。ただし、評価基準・レベルは外部評価委員の皆様それぞれの専門性等で異なることは委員会席上でご確認いただいた。従って、単に点数の高低で良否は言えないが、全般的には及第点の評価を得られたものと理解している。

以下、今後の改善に資する外部評価委員の皆様からの主な指摘内容を概観すると、自己点検評価報告書に対しては「更なる広報・知名度を高める努力・教育理念方針の明確化」「一般科目と専門科目の教員間の連携強化・常設組織の設置」「国際感覚・コミュニケーション能力・英語力のアップ」「英語教育・国際情勢理解等の更なる努力」「異文化理解のための授業・講演会・交換留学制度」「シラバスの活用向上」「部活動支援」「学生の生活面での配慮（経済・精神・健康面）」「学生による授業評価結果の活用」「近隣住民の評価・意見の取り入れ」「科研費等更なる外部資金の獲得」等である。

また、JABEEプログラム自己点検書に対しては「更なる英語力のアップ」「学習・教育目標・アドミッションポリシーの更なる周知徹底」「シラバスの活用向上」「PDCAサイクルのA（改善策のフィードバック）の確立」等が挙げられている。

これらの指摘内容は、小山高専として取り組まなければならない課題として我々が常々認識しているものも多い。今後、点検評価委員会においてこれら指摘内容を精査し、関連部署に対し今後の課題として周知させ、改善に向け対応していきたい。

最後に、ご多忙にもかかわらず本校の外部評価委員をお引き受けいただいた委員各位に対し、深大なる感謝の意を表します。また、膨大な資料調査とヒアリング調査を基に、小山高専の改革改善への貴重な道標をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

平成23年2月

点検評価委員会委員長
副校長(総務主事) 瀧澤 雄三

平成 2 2 年度 外部 評価 報告 書

平成 2 3 年 2 月 発行

発 行 小山工業高等専門学校
〒323-0806 小山市大字中久喜 7 7 1 番地
電 話 0285-20-2100 (代表)
F A X 0285-20-2880

編 集 小山工業高等専門学校外部評価委員会